

一般社団法人 日本独文学会
JAPANISCHE GESELLSCHAFT FÜR GERMANISTIK E.V.

ニュースレター2024 秋号

JGG-INFO-BLATT / HERBST 2024

2024/09/22 現在

まえがき

訃報

2024年3月3日、平尾浩三先生がお亡くなりになられました。生前、先生がドイツ中世文献学の専門家としてドイツ語ドイツ文学研究の発展と普及に貢献されましたことも、1991年から2年間、日本独文学会の理事長をお務めになられましたことも、皆さんご存知かと思います。1982年と1991年に日本翻訳文化賞を二度にわたり受賞されたのも、また、2004年に第1回日本独文学会賞を受賞されたのも、平尾先生でございました。先生の御逝去を悼み、本会を代表しまして謹んでお悔やみ申し上げます。

会長

理事長という旧役職名は、2003年以降、会長に変わりました。本会が2019年6月8日に一般社団法人に移行した後も、それ以前と同様に、選挙で選出された理事から会長が互選で選出されます。つまり、一般法人法上における代表理事が本会では会長にあたるのであります。会長は、定款に基づき、一般社団法人日本独文学会を代表して業務を執行します。また、職務の執行状況を年に2回以上、理事会に報告しなければなりません。それではどのような職務を会長が行なっているのでしょうか。この場を借りまして、皆さんに簡単に説明したいと思います。

理事会

会長はいわば船長、エンジンの点検も、客室の業務もしません。しかし、機関室のことも、客室のこともよく知っている、それが船長です。本会の全体と細部に目を凝らすために、会長は理事会を年に数回招集します。議案の他に、委員会、部会、支部の報告があるので、通常は14時に始まりますが、毎回、夕刻になってもなかなか終りません。理事会の直前には12時から常任理事会があり、数日前には庶務理事との打ち合わせがあります。以前とは違い、オンラインによるハイブリッド形式の会議も多くなりました。それでも、会長として、航路を見極めながら会員の声に耳をしっかりと傾ける点は、以前と変わりがありません。

その他の業務

会長には公文書に関わる業務も多々あります。私なりに作成や署名した文書を思い出しますと、文化ゼミ招待状、学会施設許可願、ドイツ語教員養成・研修講座参加証明書、理事応嘱継続理由書、ドイツ語学文学振興会への報告書、お悔や

み状などがありました。代表者としての渉外業務もあります。DAAD 東京事務所の Axel Karpenstein 所長や Goethe-Institut 東京の Oliver Phan-Müller 語学部長と打ち合わせをする機会もありました。昨年は、大学英語教育学会の国際大会や駐日ドイツ連邦共和国大使主催のドイツ統一記念日レセプションへの招待を受けましたが、遠隔地在住のため、いずれも参加を見合わせました。福岡在住の会長職、一長一短があります。

アジア地区ゲルマニスト会議

この間、もう一つ重要な招待状が中国から届きました。2024年8月25日から27日まで、山東省の青島でアジア地区ゲルマニスト会議(AGT)が開催されます。届いたのは、青島への招待状であり、同時に基調講演の依頼状でした。思い返しますと、AGTが日本で初めて行われたのは1999年のことです。開催地は福岡、私は九州大学文学部独文学研究室の助手だったこともあり、予期せぬことに会計の大役を仰せつかりました。2008年に金沢でAGTが行われた際には、旧会計として新しい会計担当者に助言をしたことも覚えています。2019年に札幌でAGTが行われた際、組織委員会に急遽頼まれて、ふるさと小樽の観光案内をしたこと、これまた感慨深かったです。

ドイツ、青島、福岡

第一次世界対戦時に青島をめぐって日本とドイツが衝突した後、ドイツ軍ならびにオーストリア・ハンガリー軍の兵士約4700名が俘虜として日本に連行されました。日本各地に建設された16の収容所のうち、徳島県にある坂東俘虜収容所が特に有名です。福岡県久留米市にも収容所があり、そこに収容されたドイツ人俘虜は、福岡市にある元寇防塁の修復とその記念碑の基礎工事にかかわりました。場所は九州大学の新キャンパス近くにある今津の海岸です。かつて35歳だった私は、会計として中国からの参加者を福岡にて毎晩もてなしました。この度は、会長として中国に向かいます。グローバル・ヒストリーの視点で、ドイツと青島と福岡のつながりを意識してのことです。

8月18日 福岡にて 会長 小黒康正

目 次

まえがき

ご案内

2024 年秋季研究発表会のご案内	1
Bekanntmachung der Herbsttagung der JGG 2024	2
2024 年秋季研究発表会における託児サービスについて	3
Kindertagesstätte während der Herbsttagung 2024	4
2025 年春季研究発表会のご案内	5
Bekanntmachung der Frühlingstagung der JGG 2025	6
研究会開催のための会場借用について	7
Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung 2025	8
学会当日の受付用机・椅子の借用について	9
Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung 2025	10
第 23 回日本独文学会・DAAD 賞選考への応募について	11
第 64 回ドイツ文化ゼミナール開催のご案内	15
第 29 回ドイツ語教育研究ゼミナールについて	22
2024 年度ドイツ語論文執筆ワークショップについて	23
DAAD からのお知らせ	24
ゲーテ・インスティトゥート奨学金のお知らせ	26
ドイツ語教育部会総会のお知らせ	28
会費納入について	29
一般社団法人日本独文学会会費規程	30

報告

第 21 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告(日本語部門)	32
第 21 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告(ドイツ語部門)	37
受賞の弁	41
日本独文学会 2024 年総会・春季研究発表報告	45
2023 年度ドイツ文化ゼミナール報告	46
第 28 回ドイツ語教育研究ゼミナール報告	51
2023 年度ドイツ語教員養成・研修講座報告	57
日本独文学会研究叢書既刊一覧	59
広報委員会 2023 年度活動報告	60
支部報告	62
ドイツ語教育部会報告	68
2024 年度岩崎奨学金(出版助成)について	71
「ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査」について	72
大学院 Germanistik 関係博士論文題目	73

その他

あとがき

2024 年秋季研究発表会のご案内

会員各位

2024 年 9 月吉日
日本独文学会

皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

来る 10 月 19 日（土），10 月 20 日（日）の両日，熊本大学黒髪北地区におきまして，日本独文学会秋季研究発表会を開催いたします。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

参加費

Peatix による事前オンライン決済

チケットページ <https://kumamoto2024.peatix.com/>

1. 研究発表会のみ

- ・常勤職の方：1,500 円（事前オンライン決済），2,000 円（当日払い）
- ・それ以外の方：1,000 円（事前オンライン決済），1,500 円（当日払い）

2. 研究発表会＋懇親会

- ・常勤職の方：7,000 円（事前オンライン決済），8,000 円（当日払い）
- ・それ以外の方：4,000 円（事前オンライン決済），5,000 円（当日払い）

懇親会（※懇親会費のみの事前支払いはできません。）

当日払いの方は，下記金額を受付にてお支払いください。

- ・常勤職の方：6,000 円
- ・それ以外の方：3,500 円

Bekanntmachung der Herbsttagung der JGG 2024

Liebe Mitglieder der JGG,

die Herbsttagung der Japanischen Gesellschaft für Germanistik findet am 19. und 20. Oktober 2024 an der Universität Kumamoto (Kurokami-kita-Campus) statt. Wir freuen uns auf Ihre Teilnahme.

Die Teilnahmegebühr ist im Voraus online zu überweisen:

<https://kumamoto2024.peatix.com/>

1.

Gebühr nur für die Tagung, online:

- | | |
|--------------------------------------|------------|
| – JGG-Mitglieder | 1.500 Yen, |
| – JGG-Mitglieder (ohne feste Stelle) | 1.000 Yen. |

Gebühr nur für die Tagung, vor Ort:

- | | |
|--------------------------------------|------------|
| – JGG-Mitglieder | 2.000 Yen, |
| – JGG-Mitglieder (ohne feste Stelle) | 1.500 Yen. |

2.

Gebühr für die Tagung u. das Abendessen, online:

- | | |
|--------------------------------------|------------|
| – JGG-Mitglieder | 7.000 Yen, |
| – JGG-Mitglieder (ohne feste Stelle) | 4.000 Yen. |

Gebühr für die Tagung u. das Abendessen, vor Ort:

- | | |
|--------------------------------------|------------|
| – JGG-Mitglieder | 8.000 Yen, |
| – JGG-Mitglieder (ohne feste Stelle) | 5.000 Yen. |

Gebühr für das Abendessen, vor Ort

(es gibt keine Online-Bezahlung nur für das Abendessen):

- | | |
|--------------------------------------|------------|
| – JGG-Mitglieder | 6.000 Yen, |
| – JGG-Mitglieder (ohne feste Stelle) | 3.500 Yen. |

2024 年秋季研究発表会における託児サービスについて

10月19日、20日の両日、熊本大学を会場として開催される「日本独文学会 2024 年度秋季研究発表会」に際し、託児サービスを提供します。

託児期間： 10月19日（土）午前12時から午後6時まで

10月20日（日）午前9時30分から午後5時まで

託児場所： 文法学部本館2階 実習室

託児費用：登録料として一会員あたり 1,000 円（複数人数・複数日一律）

対象年齢：生後 57 日後から小学校3年生まで

託児は、「アートワーク保育事業部」という業者に委託して行います。詳細は申込者に直接連絡いたします。

申込締切： 10月4日（金）

申込先： <https://forms.gle/7dPqVoXHS1kJDEZv8>

なお、申し込みに際しては下記の事項をお知らせください。

1. 申込者の氏名・住所・連絡先
2. 託児希望のお子様の人数・お名前・年齢・性別
3. 託児を希望する日時
4. アレルギー等特記事項

Kindertagesstätte während der Herbsttagung 2024

Anlässlich der Herbsttagung der JGG am 19. und 20. Oktober an der Universität Kumamoto wird die Kindertagesstätte unter folgenden Bedingungen angeboten:

Zeit: Samstag, 19. Oktober von 12.30 Uhr bis 18.00 Uhr
Sonntag, 20. Oktober von 9.30 bis 17 Uhr
Ort: Faculty of Letters / Faculty of Law Hauptgebäude, 2. Stock, Seminar Room
Kosten: 1.000 Yen pro Mitglied
(Pauschalbetrag für mehrere Kinder sowie mehrere Tage)
Alter Ab 57 Tagen nach der Geburt bis zur dritten Klasse der Grundschule

Die Kinderbetreuung wird von der Firma namens „Art Work“ angeboten. Das Nähere wird dem angemeldeten Mitglied direkt mitgeteilt.

Anmeldungsfrist: 4. Oktober (Freitag)
Anmeldung: <https://forms.gle/7dPqVoXHS1kJDEZv8>

Geben Sie bitte bei der Anmeldung folgende Informationen an:

1. Name, Anschrift und Kontaktadresse der/s Anmelder*in
2. Anzahl der Kinder, die zu betreuen sind, deren Namen, Alter und Geschlecht
3. Datum und Uhrzeit der gewünschten Betreuung
4. Allergien und andere besondere Hinweise

2025 年春季研究発表会のご案内

2025 年春季研究発表会は中央大学にて開催いたします。最新情報は学会 HP「日本独文学会ホームページ (<https://www.jgg.jp/>)」左メニュー「研究発表会」にてお知らせします。

研究発表をご希望の方は「発表申込書 1 (申込者情報)」(Excel 形式) をダウンロードし、「発表申込書 2 (発表概要)」(Word 形式) と共に、日本独文学会ホームページ (<https://www.jgg.jp/>) 左メニュー「研究発表申し込み」にアクセスし、「発表申し込みフォーム」よりお申込みください。その際、必ず「研究発表申し込み要領 (2020 年 2 月 1 日改訂)」をご熟読ください。申し込み審査のガイドラインもそこに記載されています。

申し込み締め切り : **2024 年 12 月 1 日 (日)**

申し込み先 : 上記発表申し込みフォーム

2024 年 9 月
日本独文学会理事会

Bekanntmachung der Frühlingstagung der JGG 2025

Die Frühlingstagung der JGG findet an der Chuo Universität statt. Die aktuellen Informationen finden Sie unter [Tagungen](#) im linken Menü auf der JGG-Webseite (<https://www.jgg.jp/>).

Wenn Sie sich als Referent*in bewerben möchten, senden Sie uns bitte das ausgefüllte Antragsformular (Excel-Datei) und Ihr Exposé in Form einer selbst verfassten Word-Datei. Um sich anzumelden laden Sie bitte beides unter [Anmeldeformular \(発表申し込みフォーム\)](#) auf der JGG-Webseite hoch.

Detaillierte Informationen sowie alle notwendigen Upload- und Download-Links finden Sie unter [Referatsanträge](#) im linken Menü auf der JGG-Webseite (<https://www.jgg.jp/>). Der deutsche Text folgt dem Japanischen.

Anmeldefrist: **So., 1. Dezember 2024**

Anmeldung unter: siehe oben

September 2024
Vorstand der JGG

研究会開催のための会場借用について

2025 年春季研究発表会の折に研究会開催のための会場の借用をご希望の場合は、下記の要領でお申し込みくださいますようお願ひいたします。

記

1) 申し込み方法

必要事項をご記入のうえ、学会ホームページ上 (<https://www.jgg.jp/>) 「研究会開催のための会場借用申し込み」フォームよりお申し込みください。なお、会場および開催形式の関係で、すべてのご希望には添えない場合がございます。

申し込み期限：2025 年 1 月 5 日（日）

2) 会場借用の時間帯

借用可能な時間帯は、学会 2 日目の午後 13 時 30 分から 16 時までです。

3) 会場使用料

教室の使用に際しましては会場校が定める一定の使用料をいただくことになります。料金については、使用教室のご案内とともに、日本独文学会事務局より開催約 1 ヶ月前にお知らせします。

- ◎ 商行為を行うことはできません。
- ◎ 詳細は研究会責任者にご連絡いたします。

2024 年 9 月
日本独文学会理事会

Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung 2025

Vereinen oder Arbeitsgruppen der JGG kann auf Wunsch bei der JGG-Frühlingstagung 2025 ein Raum zur Verfügung gestellt werden. Bei Interesse melden Sie sich bitte rechtzeitig im Büro der JGG! Aus Gründen der begrenzten Anzahl der zur Verfügung gestellten Räume und je nach Gegebenheiten des Veranstaltungsortes können unter Umständen nicht alle Wünsche berücksichtigt werden oder es kann Einschränkungen geben. Bei der Raumbenutzung muss der Antragsteller mit entstehenden Kosten rechnen.

Anmeldefrist: So., 5. Januar 2025

Das Anmeldeformular finden Sie auf der JGG-Webseite (<https://www.jgg.jp/>) bei **Tagungen** unter dem Punkt **Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung**.

Die Raumbenutzung ist am zweiten Tag der Tagung, von 13.30 Uhr bis 16 Uhr möglich.

Bitte beachten Sie:

- Geschäftliche Transaktionen sind nicht gestattet.
- Sie werden nach Bearbeitung Ihres Antrags etwa einen Monat vor Tagungsbeginn über Einzelheiten wie z. B. Informationen zu den Räumen und entstehende Gebühren benachrichtigt.

September 2024
Vorstand der JGG

学会当日の受付用机・椅子の借用について

2025年春季研究発表会の会場において、受付用に机・椅子の借用をご希望の場合は、下記の要領でお申し込みくださるようお願ひいたします。なお、会場および開催形式の関係で、すべてのご希望には添えない場合がございます。

記

申し込み方法

学会ホームページ上の「学会当日の受付用机・椅子の借用申し込み」フォームよりお申込みください。

申し込み期限：2025年1月5日（日）

- ◎ 商行為を行うことはできません。
- ◎ 詳細は団体・研究会の責任者にご連絡いたします。

2024年9月
日本独文学会理事会

Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung 2025

Vereine oder Arbeitsgruppen der JGG können auf der JGG-Frühlingstagung 2025 einen Infostand (mit Stühlen) aufstellen. Bei Interesse melden Sie sich bitte rechtzeitig im Büro der JGG! Aus Platzgründen und je nach Gegebenheiten des Veranstaltungsortes können unter Umständen nicht alle Wünsche berücksichtigt werden oder es kann Einschränkungen geben.

Anmeldefrist: So., 5. Januar 2025

Das Anmeldeformular finden Sie im linken Menü auf der JGG-Webseite (<https://www.jgg.jp/>) bei Tagungen unter dem Punkt **Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung.**

Bitte beachten Sie:

- Geschäftliche Transaktionen sind nicht gestattet.
- Nach Bearbeitung der Anmeldung wird der Antragsteller über die Einzelheiten benachrichtigt.

September 2024
Vorstand der JGG

第 23 回日本独文学会・DAAD 賞選考への応募について

第 23 回日本独文学会賞の選考対象業績を下記の要領により募集します。ふるってご応募ください。

記

1 選考対象

日本独文学会員が執筆し、2024 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までに刊行ないし印刷公表されたドイツ文学、ドイツ語学、ドイツ語教育、ドイツ語圏の文化・社会等に関する研究書および論文。自薦、他薦は問わない。なお、日本独文学会機関誌に掲載の論文は自動的に選考の対象となる。

2 部門と選考

次の部門ごとに設けられた選考委員会が、選考にあたる。

日本語研究書部門

ドイツ語研究書部門

日本語論文部門

ドイツ語論文部門

3 年齢制限

日本語研究書部門およびドイツ語研究書部門では特に年齢制限を設けないが、日本語論文部門およびドイツ語論文部門についてはドイツ語学文学振興会賞との重複を避けるため、論文の印刷公表年の 12 月 31 日現在で 36 歳以上の執筆者の論文に限る。

4 応募方法

当該の研究書または論文の原本 1 部を、論文の場合は執筆者の生年月日を明記の上（他薦の場合で生年月日が不明なら、その旨を記すこと）下記宛てに 2025 年 3 月 31 日までに送付する。封筒には「**学会賞応募**」と朱書すること。

日本独文学会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6-603

Tel:03-5950-1147

5 選考結果の発表

2025 年度末頃に学会ホームページで公表する。

6 授賞件数

日本語研究書部門・ドイツ語研究書部門：それぞれ 1 件程度

日本語論文部門・ドイツ語論文部門：それぞれ 2 件程度

7 授賞式

授賞式において、受賞者に賞状と副賞を授与する。授賞式は 2026 年春季研究発表会において行う。

Ausschreibung für die 23. JGG-DAAD-Preise

Hiermit kündigt die japanische Gesellschaft für Germanistik (JGG), die sich für die Verbreitung und Erforschung der deutschen Sprache und Literatur einsetzt, ihre Ausschreibung für die 23. JGG-DAAD-Preise an.

1. Auswahlkriterien:

- 1) Bei den Beiträgen muss es sich um Arbeiten von Mitgliedern der Japanischen Gesellschaft für Germanistik handeln.
- 2) Die Veröffentlichung der betreffenden Beiträge muss im Zeitraum vom 01.01.2024 bis zum 31.12.2024 erfolgt sein.
- 3) Beiträge, die in der Reihe „Neue Beiträge für Germanistik“ (Doitsu Bungaku) veröffentlicht wurden, werden automatisch nominiert. Weitere Nominierungsmöglichkeiten bestehen durch Selbstempfehlung oder durch die Empfehlung anderer.

2. Preiskategorien:

- 1) Wissenschaftliche Arbeiten in Buchform in japanischer Sprache.
- 2) Wissenschaftliche Arbeiten in Buchform in deutscher Sprache.
- 3) Wissenschaftliche Aufsätze in japanischer Sprache.
- 4) Wissenschaftliche Aufsätze in deutscher Sprache.

Für jede der oben genannten vier Preiskategorien wird ein Auswahlkomitee eingesetzt.

3. Altersbegrenzung:

Für Verfasser/Verfasserinnen von Beiträgen in Buchform besteht keine Altersbegrenzung. Verfasser/Verfasserinnen von Beiträgen in Aufsatzform (Kategorie 3 und 4) müssen am 31. Dezember des Veröffentlichungsjahres das 36. Lebensjahr vollendet haben.

4. Einsendebedingungen:

Ein Exemplar des wissenschaftlichen Aufsatzes bzw. ein Exemplar der wissenschaftlichen Arbeit in Buchform muss bis zum 31. 3. 2025 an die folgende Adresse eingesandt werden:

**Japanische Gesellschaft für Germanistik (Nihon Dokubun Gakkai);
Minamiotsuka 3-34-6-603, 170-0005 Tokyo.**

Auf Zettel soll das Geburtsdatum des Verfassers/der Verfasserin des Beitrags im Aufsatzform notiert und auf dem Briefumschlag soll rot der Betreff „Bewerbung für JGG-DAAD-Preise“ vermerkt sein.

5. Bekanntgabe der Entscheidung:

Ende des Geschäftsjahres 2025 wird die Entscheidung über die Preisvergabe auf der JGG-Homepage bekannt gegeben.

6. Zahl der jährlichen Preisvergaben:

Es ist davon auszugehen, dass normalerweise jährlich in den Kategorien 1 und 2 jeweils ein Preis, in den Kategorien 3 und 4 dagegen zwei Preise verliehen werden.

7. Preisverleihung:

Die Preisträger erhalten eine Urkunde sowie ein Preisgeld. Die Preisvergabe findet nach der Bekanntgabe der Entscheidung im Rahmen der Frühlingstagung der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 2026 statt.

第 64 回ドイツ文化ゼミナール開催のご案内

第 64 回ドイツ文化ゼミナールをドイツ学術交流会 (DAAD) との共催で,下記のとおり開催いたします。発表・討議はドイツ語で行います。皆さまのご参加をお待ちしております。

記

テーマ: Populäre Kultur und Literatur

(詳細は下記の Themenbeschreibung を参照)

招待講師: ニールス・ヴェルバー教授 (ジーゲン大学)

会期: 2025 年 3 月 12 日 (水) - 16 日 (日)

会場: リゾートホテル蓼科

参加費: 55,000 円程度 (三人部屋・四泊の場合)

(※ 学生・院生・非常勤職の方には宿泊費補助があります)

定員: 60 名

申込締切: 2024 年 10 月 31 日 (木)

ウェブサイト : <https://fu-lg-hum.sakura.ne.jp/tateshina64>

参加ご希望の方は、オンラインか葉書で日本独文学会にお申し込みください。

1. オンラインの場合

⇒ <https://forms.gle/ZhkKHKLzVX8jbUMBA> からお申し込みください。

2. 葉書の場合:

裏面に「文化ゼミ参加希望」と朱書の上、氏名、所属機関、現職 (参加費補助の関係上、学生・院生および常勤職のない方はその旨を明記)、住所 (漢字・ローマ字併記)、電話番号、メールアドレスを次の宛先にご送付ください:

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6 南大塚エースビル 603
日本独文学会

日本独文学会会員以外の方が申し込む際は、上記のオンラインフォームで申し込んだのちに、実行委員会 (kulturseminar64@gmail.com) まで、略歴、参加希望理由 (独文 150 語程度)、業績リスト (研究業績がある方) をご提出ください。また、あわせて日本独文学会会員 (学生・院生の場合は指導教員) の紹介が必要ですので、紹介者のお名前もお知らせください。なお、参加は原則として申し

込み順に受け付けますが、最終的な決定は理事会が行います。

研究発表について: ドイツ語による 30 分程度の発表を希望される方は、題目および要旨（独文 400 語以内）に簡単な履歴を添えて、2024 年 10 月 31 日（木）までに実行委員会（kulturseminar64@gmail.com）までお申し出ください。なお、発表者の決定は実行委員会に御一任願います。

日本独文学会・ドイツ文化ゼミナール実行委員会

Stefan Buchenberger（委員長）、麻生陽子、藤原美沙、石橋奈智、宮下みなみ、村上浩明、André Reichart, Christopher Schelletter

*実行委員会は、すべての参加者に快適な学会滞在と、実りある学術的な議論を可能にする生産的な研究環境を整えるために努力します。これらはいうまでもなく参加者相互の敬意と信頼の上に成り立つものです。文化ゼミナールはそれゆえ、いかなる言葉による嫌がらせも、性的ハラスメントも、参加者個人の人格を毀損するような言動も許しません。

Ankündigung des 64. Kulturseminars der Japanischen Gesellschaft für Germanistik

In Zusammenarbeit mit dem DAAD veranstaltet die Japanische Gesellschaft für Germanistik vom 12. bis 16. März 2025 ihr 64. Kulturseminar. Wie immer werden Vorträge und Diskussionen auf Deutsch gehalten bzw. geführt.

Das Kulturseminar soll nach längerer Pause diesmal wieder in Tateshina stattfinden.

Rahmenthema: Populäre Kultur und Literatur

Gastdozent: Prof. Dr. Niels Werber, Universität Siegen

Datum: 12. März – 16. März 2025

Tagungsort: Resort Hotel Tateshina, Chino/Nagano

Teilnahmegebühr: ca. 55.000 Yen (bei einem Dreibettzimmer für vier Nächte)

(Student:innen, Doktorand:innen und teilzeitbeschäftigte Dozent:innen können einen Zuschuss beantragen.)

Erwartete Teilnehmerzahl: ca. 60

Anmeldeschluss: 31. Oktober 2024

Internetseite des Seminars: <https://fu-lg-hum.sakura.ne.jp/tateshina64>

Anmeldung (JGG-Mitglied): Melden Sie sich bitte online auf dieser Webseite an:

<https://forms.gle/ZhkKHKLzVX8jbUMBA>

Eine Anmeldung per Post ist auch möglich. Senden Sie bitte eine Postkarte mit dem roten Vermerk „ANMELDUNG KULTURSEMINAR“ und Ihren persönlichen Daten (Name, Institution, berufliche Position, Anschrift, Telefonnummer, E-Mail-Adresse) an die Anschrift: Japanische Gesellschaft für Germanistik, Minami Otsuka 3-34-6-603 Toshima-ku, 170-0005 Tokyo

Anmeldung (Mitglied eines germanistischen Verbandes in China, Korea und Taiwan):

Melden Sie sich bitte online auf dieser Website an:

<https://forms.gle/ZhkKHKLzVX8jbUMBA>

Senden Sie bitte außerdem den akademischen Werdegang und eine Liste der wichtigsten Publikationen an das Organisationskomitee (kulturseminar64@gmail.com).

Anmeldung (kein JGG-Mitglied und kein Mitglied eines germanistischen Verbandes in China, Korea und Taiwan): Melden Sie sich bitte online auf dieser Website an:

<https://forms.gle/ZhkKHKLzVX8jbUMBA>

Senden Sie bitte außerdem den akademischen Werdegang, eine Liste der wichtigsten Publikationen (wenn vorhanden) und ein Motivationsschreiben (ca. 150 Wörter) an das Organisationskomitee (kulturseminar64@gmail.com). Darüber hinaus ist die Empfehlung eines JGG-Mitgliedes (bei Studierenden in der Regel ein Schreiben ihrer/es Betreuerin/s) erforderlich.

Da die Teilnehmerzahl begrenzt ist, werden die Anmeldungen in der Reihenfolge ihres Eingangs berücksichtigt. Die endgültige Entscheidung über die Teilnahme behält sich der Vorstand der JGG vor.

Call for Abstracts: Das Seminar bietet die Gelegenheit zur Präsentation von Vorträgen zum Rahmenthema (ca. 30 Min.). Bitte schicken Sie bis zum 31. Oktober 2024 Ihren Titel,

Ihr Resümee (max. 400 Wörter) und Ihre Kurzvita an das Organisationskomitee (kulturseminar64@gmail.com): Das Komitee behält sich vor, wenn nötig, aus den eingereichten Resümeeen eine Auswahl zu treffen.

Organisationskomitee des 64. Kulturseminars: Stefan Buchenberger (Leiter, Kanagawa Universität), Yoko Aso (Nanzan-Universität), Misa Fujiwara (Frauenuniversität Kyoto), Nachi Ishibashi (Universität Tokyo), Minami Miyashita (Städtische Fremdsprachenuniversität Kobe), Hiroaki Murakami (Fremdsprachenuniversität Nagasaki), André Reichart (Fukuoka Universität), Christopher Schelletter (Sophia-Universität)

Das Organisationskomitee bemüht sich um die Gewährleistung produktiver Arbeitsbedingungen, die allen Teilnehmer:innen sowohl einen angenehmen Aufenthalt auf der Tagung als auch ertragreiche wissenschaftliche Diskussionen ermöglichen. Diese basieren aber ganz entscheidend auf gegenseitigem Respekt und Vertrauen. Von daher werden auf dem Kulturseminar keinerlei Belästigungen oder Verstöße gegen die Persönlichkeitsrechte der Teilnehmer:innen geduldet.

Themenbeschreibung: Populäre Kultur und Literatur

„In Popkultur geht es nicht um Tiefe. Sie dreht sich um Marketing, Angebot und Nachfrage und Konsum.“ (Trevor Dunn)

„Populär ist, was bei vielen Beachtung findet.“

(Jörg Döring, Niels Werber, Veronika Albrecht-Birkner, Carolin Gerlitz, Thomas Hecken, Johannes Paßmann, Jörgen Schäfer, Cornelius Schubert, Daniel Stein, Jochen Venus, "Was bei vielen Beachtung findet: Zu den Transformationen des Populären", in: Kulturwissenschaftliche Zeitschrift, 6. Jg., Nr. 2 (2021): S. 1–24. DOI: <https://doi.org/10.2478/kwg-2021-0027>)

Allzu schnell rümpft man über populäre Kultur die Nase. Zu wenig Tiefe, zu wenig Können, keinerlei künstlerische Ambitionen etc., kurz gesagt: zu wenig Hochkultur – das sind die gängigen Vorwürfe. Die populäre Kultur sei zwar weit verbreitet – deshalb spricht man geradezu synonym auch von Massenkultur oder Kulturindustrie –, aber genau deshalb auch ohne Anspruch und Niveau; die Hochkultur dagegen sei anspruchsvoll, avantgardistisch, fordernd – und erreiche daher nur wenige Gebildete.

Dass dies nicht zutrifft, zeigt ein schneller Blick in die Statistik: Es gibt Werke der

Hochkultur, die weit verbreitet sind und sogar als Bestseller zählen oder als Publikumsmagnet die Museen und Konzertsäle füllen. Und es gibt Produkte, die der Populärkultur zugeordnet werden, wie etwa Comics, Heftromane, Filme und Songs, die kaum Beachtung gefunden haben und also nicht „populär“ genannt werden können. Zählen Daniel Kehlmanns Romane zur Populärkultur, weil sie Bestseller sind? Oder sollen Artefakte, die kaum bekannt sind, zur Populärkultur zählen, weil sie „kulturindustriell“ produziert worden sind?

Und warum sollte man populärkulturelle Artefakte, die von vielen Millionen rezipiert werden, *deshalb* weniger schätzen als Werke der Kunst, die kaum jemand kennt? Warum sollte *unbeachtlich* sein, was von vielen Beachtung gefunden hat und in diesem Sinne populär ist? Und warum sollten Werke, die *unbeachtet* bleiben, dennoch kulturell „mehr Wert“ sein, weil – wer tut dies eigentlich? Wie wird dies begründet? – sie zur „legitimen Kultur“ (Pierre Bourdieu) gezählt werden?

Welche Rolle spielt die *Popularität* in den Künsten und der Literatur? Einerseits lässt sich beobachten: Je populärer die jeweiligen Werke waren, desto erfolgreicher die Künstler:innen. Aber bedeuteten die Popularität und der damit einhergehende finanzielle Erfolg eines Kunstwerkes, sei es ein Comic, ein Film, ein Roman oder ein Lied, im Umkehrschluss, dass es von minderer Qualität sei, da es dem Geschmack der Masse entsprechend ist?

Die Antworten auf diese Fragen sind umstrittener denn je. Comic- und Heftromanleser:innen rechtfertigen ihre Vorlieben souverän durch den Verweis, dass es sehr viele sind, die sie teilen – und verbinden dies nonchalant mit dem Hinweis, dass viele der in der Schule oder in der Universität als kanonisch geltenden Autor:innen quasi unbekannt sind und „freiwillig“ von niemanden gelesen werden. Sind Goethes *Faust* oder Stifters *Brigitta* überhaupt noch Werke der „gelesenen Literatur“ (Steffen Martus / Carlos Spoerhase)? Oder werden sie nur noch als Topoi der Hochkultur erinnert, aber nicht mehr rezipiert, während zugleich *Fan Fiction* (von *Harry Potter* bis zu *Lord of the Rings*) millionenfach rezipiert werden und ein lebendiges Interesse an einer *anderen Literatur* belegen?

Zu beobachten ist *einerseits* ein Trend zur *Legitimation durch Popularität*. Selbst ästhetisch und moralisch strittige Werke werden dadurch gerechtfertigt, dass sie von vielen beachtet werden, dass sie Bestseller, Spaltenreiter, Top Hits sind. Dies ließe sich etwa an den Gedichtbänden des *Rammstein*-Sängers, „Dichters“ und Bestseller-Autors Till Lindemann zeigen. Und zu konstatieren ist *andererseits* eine Persistenz der Hochkultur, die sich in der Kritik derjenigen niederschlägt, *die beachten, was keine Beachtung finden soll*. Wer eine

Band goutiert, deren Sänger gewaltpornographische Texte schreibt und vorträgt, verdiene Verachtung. Die „vielen“, die einer Sache zur Popularität verhelfen, werden herabgesetzt – was wiederum zu Konflikten führt, da diese „vielen“ sich genau damit rechtfertigen, dass es eben viele sind, die beachten, was populär ist: Warum sollte es schlecht sein, einer Sache Aufmerksamkeit zu schenken, die schon so viel Resonanz gefunden hat? Diese Konflikte prägen die Debatte um Populärkultur und Hochkultur. Greifbar wird diese Problematik in der germanistischen Literaturwissenschaft in der von Moritz Baßler entfachten Debatte um *Midcult* oder dem Literaturstreit um den politisch umstrittenen Suhrkamp-Autor Uwe Tellkamp.

Die Literaturwissenschaft hat nicht nur den „Wert“, sondern auch die „Notwendigkeit“ der Erforschung des Populären erkannt. Eine Literaturwissenschaft, die einen großen Teil ihres Zuständigkeitsbereichs ignorieren würde, würde ihre Funktion nicht korrekt erfüllen.

Das 64. Kulturseminar der JGG möchte diesen Fragen nachgehen und hierzu Texte aus den Bereichen Ton, Bild und Schrift behandeln.

Gastdozent: Prof. Dr. Niels Werber, Universität Siegen (<https://nielswerber.de>)

Niels Werber ist Professor für Germanistik im Bereich Neuere Deutsche Literaturwissenschaft und Sprecher des DFG-Sonderforschungsbereichs 1472 „Transformationen des Populären“.

Er wurde 1990 an der Ruhr-Universität Bochum von Gerhard Plumpe und Friedrich Kittler zum Thema *Literatur als System* promoviert.

2000 habilitierte er sich ebenfalls an der Ruhr-Universität Bochum zum Thema *Liebe als Roman*.

Seit 2009 ist er Inhaber des Lehrstuhls für Neuere Deutsche Literaturwissenschaft I der Universität Siegen.

Seine Forschungsschwerpunkte sind Systemtheorie der Literatur, historische Semantik und die Theorie des Populären. Ein Teilprojekt des SFB ist die Erforschung der „Serienpolitik der Popästhetik: Superhero Comics und Science-Fiction-Heftromane“ zusammen mit dem Amerikanisten Daniel Stein. Hierbei steht die SF-Heftromanserie Perry Rhodan im Mittelpunkt.

Für Niels Werbers ausführliche Vita siehe: <https://nielswerber.de/vita/>

Ausgewählte Schriften:

- Niels Werber: „Theorien des Populären: Systemtheorie“. In: Gezählte Beachtung. Theorien des Populären, hrsg. von Thomas Hecken, Berlin: Metzler/Springer Nature

2024, S. 93-119. DOI: <https://link.springer.com/book/10.1007/978-3-662-68695-9>.

- Niels Werber: „**Das Populäre als Passion. Gesammelte Texte 1997–2019.**“ Hg. von Niels Penke und Matthias Schaffrick. Heidelberg: Universitätsverlag Winter, 2023.
- Daniel Stein und Niels Werber: „**Reassessing the Gap: Transformations of the High/Low Difference.**“ In: Arts (2023) 12(5), 199. DOI: 10.3390/arts12050199.
- Niels Werber: **Bedrohliche Popularität**, in: Following. Ein Kompendium zu Medien der Gefolgschaft und Prozessen des Folgens, hrsg. von Anne Ganzert, Philip Hauser, Isabell Otto, Berlin, New York: De Gruyter 2023.
- Niels Werber, Daniel Stein: „**Paratextual Negotiations: Fan Forums as Digital Epitexts of Popular Superhero Comic Books and Science Fiction Pulp Novel Series**“. In: Arts (2023) 12(2), 77. DOI: <https://doi.org/10.3390/arts12020077>.

Für das vollständige Schriftenverzeichnis von Niels Werber siehe:

<https://nielswerber.de/alle-veroeffentlichungen/>

第 29 回 ドイツ語教育研究ゼミナーについて

第 29 回 ドイツ語教育研究ゼミナーは、2025 年 3 月に開催する予定である。詳細が決まり次第、学会ホームページにて告知し、参加者募集を開始する。

Zum 29. DaF-Seminar der JGG

Das 29. DaF-Seminar wird voraussichtlich im März 2025 stattfinden. Sobald Näheres feststeht, werden die Informationen auf der Homepage der JGG bekannt gegeben.

(文責：草本晶)

2024 年度ドイツ語論文執筆ワークショップについて

開催日時（年明け（2025 年）を予定）や内容等、詳細は後日、日本独文学会のホームページ上で発表いたします。

（※2024 年 3 月に予定されていた 2023 年度の枠を 2024 年 9 月 13,14 日に延期して開催。2025 年年明け、年度内に本年度ワークショップを開催。）

ワークショップの開催目的・目標：

本ワークショップは大学院生・若手・中堅研究者に向けて内容が構成されています。ドイツ語での論文執筆経験のある講師による講演・質疑応答や演習を通じて、論文執筆の為のアカデミックスキルの習得を向上させることを目的に据えています。また本ワークショップを通じてドイツ語という共通点を持った研究者同士の交流の輪を広げることができます。

DAAD からのお知らせ

1. 2025 年度 DAAD 奨学金ウェブサイト更新のお知らせ

ドイツの修士・博士課程に長期留学する方を対象にした DAAD 奨学金に関する情報を、DAAD 東京事務所 HP にて更新いたしました。今回の募集要項は、昨年のものと異なる点が多くあります。2025 年度の応募を検討されている方は、奨学金ページ上部の注意事項、およびドイツ語または英語の募集要項を必ずご確認ください。

奨学金についてのお問い合わせは scholarships@daadjp.com まで、メールにてお送りください。

2. 【毎月開催】YouTube ライブ・ドイツ留学トーク

DAAD 東京事務所は毎月、現在または過去にドイツに留学された方をゲストに迎えた YouTube ライブを行っています。視聴者の皆様のご質問に答える時間もございますので、留学経験者に聞いてみたいことや、DAAD 奨学金についての疑問もどうぞお寄せください。予約・登録は不要です。YouTube チャンネル「DAAD Japan」の「ライブ」から、過去回のアーカイブもご覧いただけます。

今後は 9 月 27 日（金）に「ドイツの修士・博士課程」というテーマで配信を行います。ドイツ留学に関心がある方へのご周知もどうぞよろしくお願ひいたします。

YouTube Live : <https://www.daad.jp/ja/events/>

3. ドイツ留学相談随時受付中

DAAD 東京事務所はドイツ留学に関する相談を随時メールで受け付けています。Zoom によるオンラインでの相談も可能です。ドイツ留学相談をご希望の方は、問い合わせフォームから具体的な質問内容をお送り下さい。オンライン相談をご希望の場合は「オンライン留学相談希望」と記載し、ご希望の日時（一人当たり約 20 分、事務所開室日 14~17 時まで）をあらかじめお知らせください。

留学相談お問い合わせフォーム : <https://www.daad.jp/ja/about-us/contact/>

Informationen vom DAAD

1. DAAD-Stipendienprogramme für das Jahr 2025

Wir haben die Informationen zu den DAAD-Stipendien für Master- und Promotionsprogrammen in Deutschland auf der Website des DAAD-Tokyos aktualisiert. Die diesjährigen Bewerbungsrichtlinien unterscheiden sich in vielerlei Hinsicht von denen des letzten Jahres. Interessenten für die Bewerbung werden dringend gebeten, die Hinweise oben auf der Stipendienseite sowie die Bewerbungsrichtlinien auf Deutsch oder Englisch sorgfältig zu lesen.

Für Anfragen zu den Stipendien senden Sie bitte eine E-Mail an scholarships@daadjp.com.

2. YouTube Live - Jeden Monat ein neuer Livestream!

Die DAAD-Außenstelle Tokyo lädt monatlich Gastredner*innen, die in Deutschland studieren oder studiert haben, ein und sie sprechen über verschiedene Themen aus ihrem Leben in Deutschland. Gerne beantworten wir direkt Ihre Fragen sowohl an uns als auch an Gäste. Anmeldung ist nicht erforderlich. Unter „Live“ in unserem YouTube Kanal „DAAD Japan“ können Sie auch Archive sehen. In Zukunft werden wir am Freitag, den 27. September, eine Veranstaltung zum Thema „Master- und Promotionsprogramme in Deutschland“ übertragen. Über das Weiterleiten an Ihre Schüler*innen würden wir uns auch sehr freuen.

YouTube Live : <https://www.daad.jp/ja/events/>

3. Beratung zum Studium in Deutschland

Die DAAD-Außenstelle Tokyo steht jederzeit für Beratungen zum Studium in Deutschland per E-Mail zur Verfügung. Eine Online-Beratung über Zoom ist auch möglich. Wenn Sie sich eine Beratung zum Studium in Deutschland wünschen, senden Sie uns bitte über das Kontaktformular Ihre konkreten Fragen. Wenn Sie eine Online-Beratung in Anspruch nehmen möchten, geben Sie das bitte an und teilen Sie uns vorab Ihre Wunschtermine mit (ca. 20 Minuten pro Person zwischen 14:00 - 17:00 Uhr an unseren Öffnungstagen).

Kontaktformular: <https://www.daad.jp/ja/about-us/contact/>

ゲーテ・インスティトゥート奨学金のお知らせ



ゲーテ・インスティトゥート（ドイツ文化センター）は、大学・高等専門学校・高等学校のドイツ語教育担当教員を対象に、ドイツ語教員向け奨学金プログラムを実施しています。2025年度募集予定のプログラムは以下の通りです。

1. ドイツ語教員のためのランデスクリンデ・教授法ゼミナール（2週間）
2. ドイツ語教員のための語学コース（2週間）
3. ドイツ語教員養成者ためのゼミナール

* オンラインまたは現地での実施、またはその組み合わせ
* 研修期間中の研修費用がゲーテ・インスティトゥートより支給されます。ドイツで実施の場合はそれに加えて宿泊費全額、ならびに旅費の補助金が支給されます。

< プログラム応募資格 >

大学または高等学校、高等専門学校でドイツ語を教えている、またはドイツ語教員養成に携わっている方のうち、次の条件を満たす方

- 過去数年間にドイツ政府の奨学金を受けていない
- これまでドイツ語教育とその促進に貢献しており、研修終了後少なくとも数年間、ドイツ語教育に携る予定である
- 研修で得た知識を、今後のドイツ語教育に役立つようフィードバックする意志がある
- 研修の全プログラムに参加できる
- 研修の前提となる必要なドイツ語力を備えている

詳細は、2024年9月以降、ホームページの申込要領をご確認の上、**2024年10月10日**までにメールの添付でお送りください。

問い合わせ／申込：ゲーテ・インスティトゥート東京
ドイツ語教員研修支援プログラム係

TEL:03-3584-3201 E-Mail: stipendien-tokyo@goethe.de

Deutsch unterrichten am Goethe-Institut

Ausbildungsprogramm „Grünes Diplom“ 2025-2026

Das Goethe-Institut sucht für den Standort Tokyo Universitätsabsolvent*innen, die ab Januar 2025 an einer Ausbildung zur Lehrkraft für Deutsch als Fremdsprache interessiert sind. Mit dem **Grünen Diplom** werden Sie qualifiziert, an den Goethe-Instituten weltweit als Lehrkraft zu unterrichten.

Die Ausbildung dauert ca. zwei Jahre. Zu der Ausbildung gehören ein mehrmonatiges Traineeprogramm mit Praxisphase am Goethe-Institut Tokyo sowie ein 2-wöchiges Landeskundeseminar (in Deutschland oder online). Mit dem Abschluss der Ausbildung besteht kein Anspruch auf eine Anstellung am Goethe-Institut Tokyo. Den genaueren Ablauf finden Sie auf der [Webseite](#).

Die Ausbildungsgebühr beträgt **340.000 YEN**.

Voraussetzung:

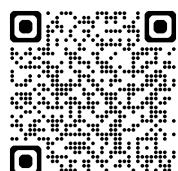
Sie haben Ihren Lebensmittelpunkt in Japan und bleiben während der gesamten Ausbildung im Einzugsbereich des Goethe-Instituts Tokyo. Sie bringen einen Bachelor- oder Masterabschluss mit, vorzugsweise in Deutsch als Fremdsprache oder Germanistik. Sie haben nachgewiesene Deutschkenntnisse mindestens auf Sprachniveau C1 des Gemeinsamen Europäischen Referenzrahmens oder Deutsch ist Ihre Muttersprache. Falls Sie nur Sprachkenntnisse auf dem Sprachniveau C1 haben, ist die C2-Prüfung während der Ausbildungszeit nachzuholen.

Bewerbungsschluss ist der 10.11.2024

Wir freuen uns auf Ihre Bewerbung (Anschreiben, Lebenslauf, relevante Zertifikate und Zeugnisse wie Hochschulabschlusszeugnis oder Prüfungszeugnis).

Bitte schicken Sie diese per E-Mail an Tomoko Maruyama
(tomoko.maruyama@goethe.de).

über das Programm „Grünes Diplom“



ドイツ語教育部会総会のお知らせ

下記の通り、通常総会を開催いたしますので、ご参加ください。

日時：2024年10月19日（土）13時15分～14時（予定）

会場：熊本大学文法学部B講義棟1階 **B1** **B3** 講義室

議題

I 報告事項

- 1) 次期幹事選挙結果について
- 2) 財政健全化ワーキンググループからの答申
- 3) その他

II 審議事項

- 1) 次期幹事委嘱について
- 2) 会費の改定について
- 3) その他

III 会員からの意見開陳

会費納入について

会員の皆様におかれましては、すみやかな会費納入にご協力いただきありがとうございます。

事務局では会員お一人お一人の会費ご納入に関して、年間を通じ必要に応じてご連絡を差し上げています。その際はご理解、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

また、以下の点をご確認ください。

【会費割引制度】

前年度末までに 80 歳になられた方、常勤職をお持ちでない方、学生の方は、ご本人からのお申し出によって、年会費の割引を受けられます。会費規程をご確認の上、事務局までお申し出ください。

【口座自動振替によるご納入】

口座自動振替のお申込みは随時受け付けています。まだお申込みでない方は是非ご検討ください。申込書をお持ちでない方は事務局までご連絡ください。お申込みくださった時点でその年度の手続き締切りに間に合わなかった場合は、自動的に次年度開始の扱いとなります。その年の年会費は振込にてご納入くださるようお願い致します。

2025 年度振替日は 7 月 1 日（火）ですので、すでにご登録の方は事前に口座残高をお確かめいただけますと幸いです。また、振替口座等の変更や年会費割引のお申し出は 4 月末までに事務局にご連絡ください。振替日は年に一度のみです。7 月 1 日（火）に振替ができなかった場合は、郵便振込をお願いしています。

【郵便振込によるご納入】

口座自動振替をお申込みいただいてない方には、学会年会費納入のお願いと払込取扱票をお送りします。

以上、よろしくお願い申し上げます。ご不明の点、ご質問は事務局（TEL./FAX : 03-5950-1147, Mail フォーム : <http://www.jgg.jp/mailform/buero/>）までお問い合わせください。

日本独文学会

一般社団法人日本独文学会会費規程

(目的)

第1条 この規程は、定款第7条の規定に基づき、入会金及び会費の納入に關し、必要な細則を定めるものとする。

(入会金)

第2条 会員は入会金として1,000円を納入しなければならない。

(入会金の納期)

第3条 入会金は、この法人から入会承認の通知を受けた日から30日以内に納入しなければならない。

(会費)

第4条 会員は、次の会費（年額）を納入しなければならない。

正会員 10,000円

賛助会員 30,000円（学術交流団体など非営利団体の場合10,000円）

(会費の納期)

第5条 会員は、当該事業年度開始の7月末日までに、会費年額の全額を納付しなければならない。

(会費の減免)

第6条 4月1日現在で常勤職を持たない正会員の当該年度会費は、本人の申告に基づいて8,000円とする。

2 4月1日現在で大学・大学院およびこれに準ずる教育・研究機関に在学する正会員の当該年度会費は、本人の申告に基づいて5,000円とする。申告は、6月1日までに学生証ないしはそれに相当する証明書のコピーを郵送もしくはファックスで学会事務局に提出することによって行うものとする。

3 4月1日現在で満80歳以上の正会員の年度会費は、本人の申告に基づいて5,000円とする。申告は6月1日までに行うものとする。

4 会費の減免は申告が受理された年度から適用し、遡って適用されることはない。

5 常勤職を持たない正会員が常勤職に就いた場合は、身分が変わった直後の4月20日までに身分の変更を学会事務局に届け出るものとする。

6 大学・大学院およびこれに準ずる教育・研究機関に在学する正会員の身分に変更があった場合は、身分が変わった直後の4月20日までに身分の変更を学会事務局に届け出るものとする。

(使用目的)

第8条 入会金及び会費は次の各号に定める事項に使用する。

- (1) 本会の運営
- (2) 本会の機関誌等の発行

(細則)

第9条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施に必要な事項は、理事会の決議により別に定めることができる。

(改廃)

第10条 この規程の改廃は、総会の決議による。

附 則

この規程は、2019年4月1日から施行する。

日本独文学会・DAAD 賞審査報告（日本語部門）

日本独文学会・DAAD 賞日本語部門の審査にあたった選考委員は、稻葉瑛志、宍戸節太郎（副委員長）、高橋輝暁（委員長）、濱中春、眞鍋正紀（敬称略、五十音順）の5名である。選考委員会は、第1回が2023年7月28日、第2回が12月27日、第3回が2024年1月6日の都合3回にわたって、いずれもオンラインで開催された。今回の日本語部門では、論文部門3編、研究書部門1編が候補となっていた。選考委員会では、分担審査するのではなく、最初から委員全員がすべての候補作について評価するとともに、その議論に加わっている。ときには激論も交わしながらのきわめて活発な討論を経て、次の2点を推薦することで委員全員の一致をみた。

日本語論文部門

犬飼 彩乃「クレメンス・J・ゼツツ『ケーフェイと文学』からみるポスト真実時代の第四の壁」（『ドイツ文学』164号、2022/03/25）

日本語研究書部門

二藤 拓人『断片・断章を書く——フリードリヒ・シュレーゲルの文献学——』（法政大学出版局、2022/09/26）

以下、上記の2作を推薦する理由の説明にあたって、その根拠となった積極的評価だけでなく、選考委員会で議論された問題点や批判、異論等の一端も含めて記す。当該研究に関するさらなる議論のきっかけになれば幸いである。

日本語論文部門

犬飼 彩乃「クレメンス・J・ゼツツ『ケーフェイと文学』からみるポスト真実時代の第四の壁」（『ドイツ文学』164号、2022/03/25）

「ケーフェイ」（英: *Kayfabe* [keɪfæb]）とは、「語源不明のプロレス用語」で、リング上における演出・演技を意味する。西洋近代演劇の額縁舞台では、舞台上と観客席とを区別する「第四の壁」の設定が、役者と観客との間で暗黙の了解事項だ。虚構の世界としての舞台から降りた役者は、役から離れて現実世界に戻った素人間として認識されねばならない。ところが、リングという舞台で演出された格闘を演じる「プロレスラーたちは、虚構としてリング上で消費されるはずのキャラクター設定をリング外でも引き続き演じるよう求められる」。それによって

リング上で演じている虚構のキャラクターがリング外の現実になってしまう。

「ポスト真実」(post-truth / postfaktisch)の時代と言われる現代では、まさに虚構としての嘘が、ケーフェイにより真実として流布する。それは、人びとが「事実よりも感情」を、「事実を無視するどころか明らかな嘘をすすんで受け入れよう」とする時代にほかならない。その「ポスト真実」をめぐる議論には、「ポスト真実」における「真実の相対化や無効化」をポストモダニズムの思想に帰する論調がみられるという。

こうした論調とは一線を画す作家をクレメンス・ヨハン・ゼツ (Clemens Johann Setz) に認める犬飼論文は、1982年グラーツの生まれでポストモダニズム文学の影響を受けたこの作家の講演『ケーフェイと文学』が提示する視点に沿って、その作品を分析してゆく。それによると、ゼツの作品は「複雑に入り組ませた『第四の壁』」を設定して「ポスト真実時代」の具体的現象を例示することにより、「壁」の向こうの虚構がこちら側の現実に侵入する「ポスト真実」のからくりを暴いてみせる。「虚構」が「現実に混じり込んでいる」現代にあって、そもそも「虚構」の物語の制作を職分とする作家という「虚構の専門家」ゼツは、「情報の受け手たち」に対して、こうした「現代の虚構」を「見破る目を養い『ポスト真実』に対抗するよう呼びかけた」というのが、犬飼論文の結論だ。

「ポスト真実」の言説が政治的次元でも「嘘」の正当化に利用される「ポスト真実時代」の作家として、ゼツは「ポスト真実」に対抗するところに「文学の役割」を見ている。この点に着目する本論文は、こうした現代作家の本分を実践する作品について、幅広く深い理解に基づく解説により、ゼツのきわめてアクリュアルな魅力を引き出す。また、論述の組み立てが巧みで、丁寧な用語説明と明快な論旨とがあいまって、その読ませる文章は高く評価できる。

しかし、個々の点には異論や不備の指摘もあった。たとえば、結論についても、ゼツの論を、同じく「ポスト真実」に対抗する研究者ニコラ・ゲス (Nicola Gess) の説に回収しているように読めてしまい、ゼツ文学の「個性」的魅力を説明してきたはずのそれまでの立論が台なしになるとの印象を与える。さらに、いわゆる「学術論文」の一般的基準からすると、先行研究の整理やそれらに対する批判的論述が不足しており、いわば、ゼツの立論に乗って論を展開しただけではないかとの批判にも一理あるだろう。これらの問題は、本論文の独自性に対する疑念を生む。だから、犬飼論文は、ゼツについての学術論文ではなく、解説文に留まるとの辛口の意見もあった。

これに対して、一般的にみると、特に直近の現代文学については、文芸批評的議論は盛んであっても、いわゆる「学術論文」と言うべき先行研究が少ない、あるいは、古典的文学の研究とはスタイルが異なる、そもそも「学術論文」にもさ

さまざまなスタイルがあるなどの異論もあり、「学術論文」と「学術賞」の基準をめぐって活発な議論に及んだ。その結果、「学術論文」の明確な基準を設定するのではなく、多様な論述スタイルを容認する方向で評価し、内容のアクチュアリティや魅力に加えて、それを活かす明快な論旨を多とすることになった。以上が、本作品を授賞論文として推薦するに至った経緯の概略である。

日本語研究書部門

二藤 拓人『^{フラグメント}断片・断章を書く —— フリードリヒ・シュレーゲルの文献学 ——』(法政大学出版局, 2022/09/26)

本書は、主題に「断片・断章を書く」とあるように、フリードリヒ・シュレーゲルの「断片・断章」すなわち「フラグメント」が書き付けられる書記行為のプロセスを解明し記述する研究の成果で、その第一義的研究対象は、シュレーゲルの書記行為そのものだ。だから、フラグメントのテクストが幾多の修正や書き直しを経て形成される過程について、既成の校訂版『シュレーゲル全集』だけでなく、しばしば手稿を参照しながら分析しているのも、その目的は、書記行為の解明にある。その意味で本研究は、「フリードリヒ・シュレーゲル」に関する「文献学」ではあるとしても、旧来の「文献学」とは異なり、手稿に基づく「正しい」テクストの復元やその解釈を目指していない。そうではなく、「読む」「書く」という具体的行為によって思考を形成する人間の〈習性〉(Habitus) を、「断片・断章を書く」書記行為、そのようないわば文献学的行為として、メディア論的観点から説明しようというのだ。

この新しいメディア論的観点を構想したところに、本書の独自性があり、そこには衝撃的なインパクトがある。したがって、副題に「フリードリヒ・シュレーゲルの文献学」というのも、従来のようなシュレーゲル研究を意味してはいない。シュレーゲルのテクストを解釈学的に解明して、そこから思想を抽出するところに、その目的があるわけではないからだ。本書は、メディア論的観点から人間の〈習性〉としての書記行為が思想を形成する様相について詳らかにするのだから、シュレーゲルのフラグメントは、その目的のために選ばれたサンプルだと言ってもよかろう。

このような本書には、新鮮な指摘や示唆が少なくない。たとえば、シュレーゲルのフラグメントの手稿について、ノートの余白、随所に引かれた下線、略号や数式、定型句の使用などが、断章を読み、書き、考える営みを推進する過程について詳らかにした「第二部 文化技術としての断章的書記」は圧巻で、説得力をもつ。19世紀においてドイツ文献学が確立してゆく過程で、その一翼を担ったシュレーゲルの作業場をまじまじと覗くかのようだ。

現在でもテクストの個々の箇所に関する注記や解釈は一般に広く流布しており、われわれには馴染み深い。シュレーゲルの書記行為を再構成する本書を読むと、こうした注記や解釈が、まさにシュレーゲル的「断片・断章」すなわち「フラグメント」そのもの、あるいはその延長上にあることに気づく。こうした注記や解釈こそは、とりわけ20世紀以来の文献学において、テクスト校訂とともに二本柱のひとつを成す〈個別箇所の注釈〉(Stellenkommentar)にほかならない。そうであれば、現代の文献学においても不斷に「断片・断章を書く」という書記行為が繰り返されていることになる。さらに一步進めて考えれば、文献学的校訂に裏打ちされたテクストを読む読書行為に基づく人文学的研究の営みも、実は「断片・断章を書く」書記行為の一部だと言えよう。テクストの解釈行為や批評行為においても、フラグメント的書記行為が積み重ねられているわけだ。そうなると、シュレーゲルに限らず、われわれ人間の〈習性〉としての思考までもが、少なくとも潜在的には、フラグメント的書記行為のように思えてくる。こうした認識を誘発するのも、本書のインパクトのひとつにちがいない。

ところが、本書の錯綜した論述のぎごちなさは、ほとんど目を覆うばかりと言ったら、厳しすぎるだろうか。新しい観点と方法による論述には、新しい概念と言語表現が求められることは確かだ。それにしても、ものごとには限度があるだろう。本書全体にわたって、個々の箇所で論述の仕方や目的について説明するいわば能書きが、過剰なまでに反復される。これは、明らかに論述の流れを大きく阻害する要因と言わざるをえない。そもそも、能書きで繰り返し予告されたことがどこで果たされ、また本当に論証されているのかも、にわかには分からぬほどなのだ。そんな「能書き」が300頁余りの本書の半分近くを占めるとなれば、これはもう過剰な反復である。だから本書はメディア論的研究の方法論的理論書だとの見立てを述べる委員もいた。本書をそのように読むなら、ここに提示されているのは、理論的「断片・断章」の集積、しかも理論的整合性を欠いた集積にすぎないと批判されてもしかたない。

加えて、誤字脱字や日本語の誤用も数多く指摘された。再度の整理と徹底した推敲を要するきわめて荒削りの文章で、少なくとも「文献学」を副題に掲げる研究書には相応しくない。「文献学」の原語 *Philologie* は、ギリシア語の形容詞 *philos* (愛する) と同じく名詞 *logos* (言語) から成る合成語に由来するから、それは、もともと「言語への愛」に基づくはずだ。研究の対象となる言語についてはもちろん、論述する「言語」に対しても、さらなる「愛」があつてしかるべきだろう。

とはいえ、こうした欠点をも吹き飛ばすのが、本研究の強烈な起爆力にほかならない。ドイツ語圏文学研究の枠組みにおいて、作家研究、文献学、解釈学、文化研究などをもメディア論に組み込んで創出した研究方法は、ゲーム・チェンジ

ヤーになるかもしれない——こんな期待を寄せる声も委員会で出ている。

20世紀の芸術家岡本太郎は「芸術は爆発だ」と言った。あたかも「研究は爆発だ」と言わんばかりの本書を、有能な才能に対する激励の意味を込めて、授賞にふさわしい研究成果と評価し、推薦する所以だ。

(文責：高橋輝暁)

Bericht über die 21. JGG-DAAD-Preisverleihung: Preise für Arbeiten in deutscher Sprache

Das Auswahlkomitee für den JGG-DAAD-Preis, bestehend aus sechs Mitgliedern (Akihiko Fujii, Susumu Kuroda, Shinji Miyata (Leitung), Mechthild Doppel-Takayama, Leopold Schlöndorff), hielt drei virtuelle Sitzungen per Zoom ab. In der ersten Sitzung am 31. Juli 2023 wurden die Verfahrensweise zur Auswahl und die Arbeitsverteilung festgelegt. Jede der nominierten Arbeiten, bei denen es sich um ein Buch und fünf Aufsätze handelte, sollte von mehreren Mitgliedern begutachtet werden. In der zweiten Sitzung am 11. November wurden zwei der Aufsätze ausgewählt. Nachdem alle Mitglieder das Buch und die zwei Aufsätze näher gelesen hatten, wurde in der dritten Sitzung am 23. Dezember im Anschluss an eine intensive Diskussion über die Empfehlung an den Vorstand zur Preisverleihung entschieden.

Folgende Arbeiten wurden prämiert:

Preiskategorie 1: Wissenschaftliche Aufsätze in deutscher Sprache

Mototsugu KATSURA (桂元嗣) : Die Heimat eines Heimatlosen. Autobiografisches Erzählen bei Milo Dor

Neue Beiträge zur Germanistik Band 20/Heft 1, 『ドイツ文学』163号, 2022年3月, S. 85–100.

Der Aufsatz von Mototsugu Katsura behandelt Milo Dor, einen österreichischen Schriftsteller serbischer Herkunft, und die Entwicklung seiner Arbeit während des Kalten Kriegs unter Fokussierung auf den Zusammenhang seiner Selbstthematisierung und der Kunst des Erzählens. Sein Erstlingsroman *Tote auf Urlaub* (1952), der seine Teilnahme an der Widerstandsbewegung während der Nazi-Besatzung und seine Foltererfahrungen während seiner Verhaftung und Inhaftierung themisierte, fand in Österreich wenig Resonanz. Im Gegensatz dazu wurde sein zweiter Roman *Nichts als Erinnerung* (1959) um seine serbische Herkunft, der den Ausgangspunkt für die Trilogie bildete, die er als in Budapest geborener, in Belgrad aufgewachsener und in Wien lebender Schriftsteller verfasste, gut aufgenommen. Sich von der Interpretation distanzierend, die dies als einen Versuch betrachtet, sich an die österreichische kulturelle Situation anzupassen, betont Katsura, dass das Bemühen, „die Mehrdeutigkeit der Selbstidentität“ auszudrücken, ein durchgängiges Merkmal von Dors schriftstellerischer Praxis ist. Er führt weiter aus, dass

mit diesem Bemühen verschiedene Erzählformen verbunden sind, wie etwa eine Schreibweise, in der ein anderes Ich neben dem erzählenden Ich auftaucht und Letzteres von Ersterem beobachtet und angesprochen wird, sowie ein Format des „Interviews des Autors mit dem Selbst“. Als heimatloser Schriftsteller, der von den Nazis nach Wien verschleppt wurde und sich nach dem Krieg entschied, dort als Milo Dor zu leben, hatte er das Bedürfnis, in sich ein „neues, erweitertes Selbst“ zu finden, das ihm das Gefühl gab, „nie allein“ zu sein. Zum Schluss des Aufsatzes wird festgestellt, dass dieses Bedürfnis – mit seinem Bemühen untrennbar verbunden, die „Mehrdeutigkeit der Selbstidentität“ zum Ausdruck zu bringen – ihn zu der in seinen Essays präsentierten Idee von Mitteleuropa geführt habe, die mit seiner eigenen Herkunft und seinen Familienerinnerungen verbunden sei. Dor musste „unter großen Anstrengungen ein erweitertes Selbst in seinen multiethnischen Wurzeln finden.“ (aus dem Abstract)

Die Darstellung der biographischen Fakten des Künstlers, die Analyse seiner Erzähltechniken und die Schilderung der Entwicklung der Themen seiner Werke sind in dem Aufsatz klar miteinander verknüpft. Dem Aufsatz gelingt es, einen Aspekt der österreichischen Kultursituation zu beleuchten, indem er den Prozess der Veränderung von Dors Reputation im österreichischen Kulturkontext der Nachkriegszeit nachzeichnet, und gleichzeitig gelingt es ihm, die innere Konsistenz in Dors schriftstellerischer Entwicklung darzustellen. Obwohl angemerkt wurde, dass die Argumentation in den letzten Abschnitten über „Heimat“ und „Mitteleuropa“ noch ausbaufähig sei, war das Auswahlkomitee einstimmig der Meinung, dass der Aufsatz in seiner Gesamtheit des JGG-DAAD-Preises würdig ist.

(Shinji MIYATA)

Preiskategorie 2: Wissenschaftliche Arbeiten in Buchform in deutscher Sprache

Megumi SATO: Sprachvariation und Sprachwandel im 18. und 19. Jahrhundert. Untersuchungen zur Kasusrektion der Präpositionen *wegen*, *statt*, *während* und *trotz*. Heidelberg (Winter) 2022. 382 Seiten.

Die Salzburger Dissertation beschäftigt sich in der Hauptsache mit dem Wandel der Kasusrektion von *wegen*, nämlich mit dem Genitiv oder Dativ. *Wegen* mit Dativ ist heute in der gesprochenen Sprache weit verbreitet. Die Arbeit stellt in der Forschung noch nicht geklärte Fragen zur Diskussion, etwa ob die Dativ-Variante insb. im Falle von *wegen* eine neuere Erscheinung darstellt, bzw. seit wann sie konkret anzutreffen ist und wie sich die Kasusvarianten diachron betrachtet gewandelt haben.

Nach einer Reihe von Untersuchungen und Beobachtungen, die diachronische, diatopische, diastratische und diaphasische Faktoren berücksichtigen, kommt die Arbeit zu folgenden Hauptergebnissen:

1. Die Zunahme der Dativ-Rektion und deren Ko-Existenz mit der Genitiv-Rektion in der Schriftlichkeit finden sich bereits im 18. Jahrhundert, zunächst im oberdeutschen, dann im mittel- und niederdeutschen Sprachraum. Dies stellt einen ‚Sprachwandel von unten‘ im Sinne von William Labov dar. Der Gebrauch des Dativs trat zunächst in der gesprochenen Sprache auf und vollzog sich unterhalb der Schwelle der sozialen Aufmerksamkeit, bevor er schließlich in der konzeptionellen Schriftlichkeit sichtbar wurde.
2. Im 19. Jahrhundert nimmt die Dativ-Variante in der konzeptionellen Schriftlichkeit bzw. auf der Höhe der Distanzsprache zugunsten der Genitiv-Variante ab. Diese Entwicklung lässt sich u. a. auf den Einfluss des im ostmitteldeutschen Raum tätigen Grammatikers Johann Christoph Adelung zurückführen, der die Dativ-Rektion negativ beurteilte. Seine Grammatiken, bzw. die auf seiner Arbeit aufbauenden Regelwerke wurden im 19. Jahrhundert im Deutschunterricht an höheren Schulen eingesetzt. Hier liegt also ein ‚Sprachwandel von oben‘ als Ergebnis eines regulierenden sozialen Handelns vor.

Die Arbeit stützt sich auf drei umfangreiche Korpora, einen ca. 29 Millionen Wörter umfassenden Gebrauchstextkorpus aus dem Zeitraum von 1520-1870, einen Literaturkorpus aus dem 18. Jahrhundert und einen Zeitungskorpus 1750-1850 (ca. 69 Millionen Wörter). Zudem wurden über 100 Grammatiken und Wörterbücher aus dem 16. bis 19. Jahrhundert zur Bewertung der metasprachlichen Äußerungen herangezogen. Die Ergebnisse wurden gut nachvollzierbar dargestellt und auch grafisch eingängig aufbereitet.

Besonders hervorzuheben ist, dass die Arbeit nicht nur auf der Grundlage von Textkorpora die historische Entwicklung nachzeichnet, sondern auch mit vielen konkreten Beispielen die Sprache ‚vor Ort‘ zu erfassen versucht. Dazu zählen private Briefe der Familie Mozart, Briefe und Tagebücher von Johann Wolfgang von Goethe und nicht zuletzt die intensiv rezipierten Konversationshefte von Ludwig van Beethoven. Nach dem Verlust des Hörvermögens kommunizierte der Komponist bekanntlich mit Hilfe der Hefte mit seinen Verwandten und Freunden. Die Autorin veranschaulicht damit, wie die Kasusrektion im vertrauten Umgang beschaffen war. Erwartungsgemäß überwiegt in den Quellen aus Wien, das zum oberdeutschen Sprachraum zählt, der Gebrauch des Dativs. Eine Ausnahme bildet der Sprachgebrauch von Beethovens Neffen Karl, der in der Kommunikation mit seinem Onkel fast ausschließlich *wegen* mit Genitiv verwendet, was auf eine distanzierte

Kommunikationssituation zurückgeführt wird und mit Disharmonien zwischen den beiden in jener Zeit in Verbindung gebracht werden kann.

Bedauerlich ist jedoch, dass die methodische Einschränkung der Arbeit, nur Belege im Singular Maskulinum und Neutrum zu berücksichtigen, nicht ausführlicher diskutiert und lediglich in einer Anmerkung erwähnt wird. In einigen Fällen erscheinen auch die Belegzahlen für valide Ergebnisse als relativ niedrig angesetzt. Schließlich muss auch das Fehlen von Registern vermisst werden. Ein Personenregister würde etwa den Zugang insb. für literatur- und musikgeschichtlich Interessierte erheblich vereinfachen. Trotz dieser Einschränkungen erscheint die Arbeit als wichtiger Beitrag zur Forschungsdebatte, der sich durch eine klare Konzeption, eine präzise Recherche sowie durch eine eingängige Präsentation und Zusammenfassung der überzeugenden Ergebnisse auszeichnet.

(Akihiko FUJII)

受賞の弁　日本語論文部門

犬飼彩乃

このたびは、第21回日本独文学会・DAAD賞にお選びいただき、身に余る光栄です。まさか自分のようなものがいただける賞とは思っておらず、感激しつつも大変恐縮しております。

これはどうしたことかと先日、自分でも論文を読み返してみました。あまりの未熟さに顔から火が出るかと思いましたが、本論の構想時のことと思い出しました。みなさまもご経験がおありだと思いますが、学生からドイツ語って役に立つのか、文学はなんのために勉強するのかと聞かれことがあります。毎回それらしいことを答えはするのですが、あとから自分でも文学の時代はもう終わったのではないか、学生を納得させられるドイツ語を勉強する意味というものはあるのだろうかと、考え込んでしまうこともあります。私のような小心者は、思えば院生のころから瑣末なことで常に迷い、優柔不断の日々を過ごしてまいりました。

クレメンス・J・ゼツツの文学には、そうした私の迷いに答えをくれるような示唆が多く含まれています。今回論考の対象としましたスピーチも、あらためて今後の文学の役割を示す野心的な提言です。そのためこれはとにかく日本語で紹介しなければという思いで、自分なりに熱意をこめて論文としました。査読委員の先生、審査員の先生には、私の拙い文のなかからそのような意気込みを最大限汲み上げていただいたのではないかと感じました。なによりこのように多くの方の目に触れる機会をいただけたことは、執筆者として大変ありがたいことです。寛大な評価に深くお礼を申し上げます。また本研究には多くの先生がたにお世話になりました。本作家の小説との出会いを作ってくださったドイツ現代文学ゼミナールのみなさま、不慣れなイベントにお付き合い・ご協力いただきました先生がた、さらには作家の評価が定まらない頃から好奇心だけで突き進むバカな人間を温かくお見守りいただいた所属教室の先生がた、本論文の前段階として翻訳出版にご助力いただきましたゲーテ・インスティトゥート東京、出版社をはじめ関係各所のみなさま、さまざまなお力添えをいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。まだまだ今後も研究は続きますので、みなさまには引き続きご指導ご鞭撻の程を、この場をお借りし恐縮でございますが、平によろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

(東京都立大学助教)

受賞の弁　日本語研究書部門

二藤 拓人

本書を書くために読んだ文献のなかに『芸術における未完成』があります。ヴァレリー曰く、印象派のドガは自分の絵を見るとそれを修正したり描き直したりする誘惑を感じずにはいられず、すでに手放した絵を取り返すことさえあり、何人かの所有者は彼の絵に錠前をかける始末だったといいます。ここで画家がみせている—あるいは芸術が自ずからそのように仕向けている—完璧さへの意思とそこへ漸近しようとする欲求は、まさにロマン主義的な *Unendliche Perfektibilität* の好例です。

もし本当に際限なく書き直しが可能だとすれば、絵画における創作は断片（未完成）であり続けられます。しかし文芸の創作の場合は、紙面上のスケッチや書き溜められた草稿は、清書、編集、組版・印刷、複製、出版・公開というプロセスを通じて書き直し困難なものとなります。修正可能性に開かれた書字の秩序が、綴じられた本の完成によって断ち切られる。近代以降の *Literatur* が引き受けていいるこの技術的・物質的条件は、作品の創作プロセス（=Poesie の生成）を自覚的に主題にした初期ロマン派の理論構築にこそ決定的に関与しているはず—断片をテーマにした本書の多くの立論を支えたのは、この確信だったように思います。

また本書は、ロマン派による *Unendliche Perfektibilität* がまさしく書字の秩序に基づいている可能性を、フリードリヒ・シュレーゲルの書きつけた手稿断章群の分析によって例証する試みでもあったと思っています。余白に書き足され、下線が引かれ、術語群が円滑に結合されていく断章の書記現場には、書き出された着想を際限なく発展させたいと思う人間の習性が可視化されています。そこで駆使されている筆記法がシュレーゲルだけの書記技術にとどまらず、人文的な〈書く〉の文化技術一般といかに関わるか。今後はこの問い合わせをめぐり、本書が萌芽的に示した「書字メディア論」を更に展開していきたいです。

このたびは身に余る賞をいただき感謝の念に堪えません。たいへん光栄に思うと同時に、非常に勇気づけられています。その一方で、5年以上も前の博士論文がもととなり綴じられたこの本をいま読むと、「手放した絵」を書き直せないもどかしさが湧いてくるのも事実です。そんな拙い著作をお読みいただき、審査の任にあたってくださった選考委員のみなさまには特別の感謝を申し上げます。ありがとうございました。

（西南学院大学准教授）

受賞の弁 ドイツ語論文部門

桂元嗣

このたびは第 21 回日本独文学会・DAAD 賞に拙論をお選びいただき、身に余る光栄です。審査を担当された選考委員の皆様に心より感謝申し上げます。本論文は『ドイツ文学』163 号の特集「日本におけるオーストリア研究」に掲載されたものです。掲載にあたり貴重なご意見をくださいました編集委員の皆様をはじめ、原稿に何度も目を通してドイツ語や内容の修正をご提案いただいた方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

論文の対象であるミロ・ドールについては、1990 年代以降、日本でも研究が進められており、なかでもドール自身が言及する多民族・多言語的な自己認識に焦点が当てられてきました。しかし彼がウィーンで作家活動をスタートさせた当初は自らのルーツへの言及は少なく、むしろベオグラードの同志と参加したパルチザン運動や、収監先で体験した壮絶な拷問についての描写が中心でした。またアンシュルス後のオーストリアを批判的に描くドールの小説は、反共的な雰囲気に満ち、いわゆる犠牲者テーマが浸透しつつあった戦後復興期のオーストリアでは全く受け入れられませんでした。ゆえに従来の研究では、ドールの自らのルーツへの接近は、ウィーンの文壇で孤立したドールが戦後オーストリアの歴史認識や文化政策をふまえて自らを意識的に周縁化させた結果であるとみなされてきました。

本論文はドールの自伝的語りに着目し、最初期の小説に見られる、死者となつた同志をもう一人の自分のように包摂する拡大された自意識が形成される「決してひとりではない」場こそが彼がベオグラード時代に見出し、ウィーンでの作家生活と共に徐々に失われていった彼の故郷であること、そして彼が新たな故郷として見出したのが、彼の出自と家族の記憶とともに結びついた中欧だったと結論づけました。本論文がドールというほぼ忘れられた作家に再び光を当て、他者を包摂しつつ拡がる中欧の多文化的世界の考察にいささかなりとも貢献することになれば嬉しい限りです。

とはいって、私の考察は代表作を中心とした限定的なものであり、作家ドールの全体像はまだ十分にはとらえきれていません。当時のユーゴスラヴィアにおける同胞概念との関連や、共作者フェーダーマンの存在、翻訳活動の影響など、論じるべき点はまだ多くあります。このたびの賞は私の今後の研究への励ましと考え、本論文の不足を補いつつ発展的な研究をすべく、決意を新たにしております。このたびは誠にありがとうございました。

(武蔵大学教授)

受賞の弁 ドイツ語研究書部門

佐藤 恵

このたびは第 21 回日本独文学会・DAAD 賞という栄誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。審査に関わってくださった先生方をはじめ、学会を運営してくださっている先生方に心よりお礼を申し上げます。拙著は 2020 年秋にザルツブルク大学に提出した博士学位論文に加筆・修正を施したものですが、今回の受賞は、母校である慶應義塾大学、学習院大学、ザルツブルク大学の先生方の温かく熱心なご指導と、学ぶことの楽しさや奥深さを共有し、多くの刺激を与えてくれた先輩・後輩、同級生のみなさまのおかげによるものです。日本独文学会および語学ゼミナールで発表の機会をいただいた際、貴重なコメントや有益な質問をしてくださった先生方、そして博士論文執筆中に同僚として励まし、仕事面でも大いに協力してくださった前任校・獨協大学の先生方にも、この場をお借りしてお礼を申し上げたいと存じます。

本書では、書きことばの資料として自分で作成した「散文コーパス 1520-1870 年」(書籍 140 冊、約 2,500 万語)、「新聞コーパス 1750-1850 年」(総語数約 8,500 万語) に加え、歴史的段階の話しことに近い資料として、作曲家ベートーヴェンの筆談帳、ベートーヴェン、モーツアルト一家、ハイドン、バッハの息子たち、ゲーテの書簡、さらには戯曲 (1750~1850 年) の台詞部分を使用し、属格支配とされる前置詞 *wegen*, *statt*, *während*, *trotz* の格支配を調査し、その歴史的変遷をあぶり出そうと試みました。その結果、属格と与格の使い分けには地域差だけではなく、社会的階層による違い、さらには相手との人間関係が近いかどうかという語用論的な要因も確認することができました。本書では量的な分析と質的な分析を組み合わせ、「データに語らせる」ことを目指したつもりですが、一部の言語資料では用例が少なすぎるため、分析に説得力を欠く部分もありました。実証的な研究が中心で、理論的な考察が不十分だという欠点があることも自覚しております。そういうわけで私の研究はまだまだ未熟なものですので、今後もみなさまにご指導ご鞭撻をいただきながら研鑽を積んでいく所存です。学会に出かけていくと、「*wegen* の人ですよね?」と声をかけていただくことがたびたびありました。今後は名前を覚えていただけるよう、新しいテーマにも挑戦していきたいと存じます。

(慶應義塾大学文学部助教)

日本独文学会 2024 年総会・春季研究発表会報告

2024 年 9 月 1 日

2024 年総会・春季研究発表会は、6 月 8 日（土）および 9 日（日）に慶應義塾大学にて対面方式で開催された。

1 日目は 10:00～18:00、2 日目は 10:00～13:10 に開催された。研究発表に先立ち、日本独文学会総会、日本独文学会・DAAD 賞授賞式、ドイツ語教育部会総会が開催された。研究発表会の内訳はシンポジウム 4 本、口頭発表 13 本、ポスター発表 1 本、ブース発表 1 本であった。また、学会プログラムと並行して、朝日出版社・郁文堂・三修社・同学社・白水社・ひつじ書房各書店による書籍展示が実施された。

収支報告は以下の通り：

収入：

学会本部運営補助金	¥600,000
ドイツ語学文学振興会からの助成	¥50,000
慶應義塾大学からの学会補助費	¥479,380
参加費	¥539,000
二日目研究会教室使用料	¥58,000
ドイツ語教育部会アルバイト代	¥17,400
計	¥1,685,780

支出：

研究発表会教室使用料	¥479,380
理事会等教室使用料	¥33,220
人件費（アルバイト代）	¥386,650
スタッフ昼食お弁当代	¥104,442
スタッフ飲み物代	¥20,542
スタッフ宿泊代	¥26,400
事務用品代	¥11,582
各種手数料	¥2,566
郵送料	¥1,950
ドイツ語教育部会アルバイト代	¥17,400
学会事務局への返金	¥601,648
計	¥1,685,780

収支合計

¥0

（企画担当理事：川島隆・武田利勝）

2023 年度 ドイツ文化ゼミナール報告

2023 年度 ドイツ文化ゼミナールは、2024 年 3 月 13 日（水）から 17 日（日）まで、慶應義塾大学日吉キャンパスで開催された。講師はエーファ・ゴイレン教授（ベルリン・ライプニッツ文化文学研究所所長）。Covid-19 の蔓延の影響がまだ残っており、前年度と同様、一週間近い合宿でのゼミナール開催は断念し、「通い」での実施となった。遠隔寄りの参加者のために、慶應義塾大学内の宿泊施設を利用することはできたが、夜の時間帯のプログラムなどは、やはり合宿のようにはできなかった。それでも、日本全国はもとより、韓国から多くの参加者を得て、活発な討論が行われた。

総合テーマ : Formen der Natur – Formen der Kultur. Ihre Bestimmung und Transformation von der Goethezeit bis in die Gegenwart

参加者 : Eva Geulen (Leibniz-Zentrum für Kultur- und Literaturforschung), 杉山東洋 (京都大学), 寒河江陽 (慶應義塾大学), Alexander Imig (中京大学), 森野紗英 (早稲田大学), 渡邊徳明 (日本大学), 若山真理子 (東京大学), 假谷祥子 (神戸大学), 川島建太郎 (慶應義塾大学), 須藤秀平 (京都大学), 西尾宇広 (慶應義塾大学), 李依妮 (ソウル大学), 有家真奈 (慶應義塾大学), 白井史人 (慶應義塾大学), 中村大介 (慶應義塾大学), 洪樵风 (ソウル大学), Hyang Jo (ソウル大学), 綾戸啓太 (神戸大学), 坂崎未依 (名古屋大学), Yui Akiyama (京都大学), 山本浩司 (早稲田大学), *茅野大樹 (筑波大学), 太田浩司 (帝京大学), *北川千香子 (慶應義塾大学), *久山雄甫 (神戸大学), *高橋優 (福島大学), *橋宏亮 (慶應義塾大学), *Markus Joch (慶應義塾大学), *柳橋大輔 (早稲田大学), **糸川麻里生 (慶應義塾大学)

(**実行委員長, *実行委員)

総合テーマについて

今回の文化ゼミナールでは、「Formen (形態)」という概念を手がかりに、文学的・理論的なテクストを読み解きながら、自然と文化の関係についてさまざまな角度から議論を行った。

人間の文明は世界的に転換期を迎えており、自然と文化の関係は再定義されなければならない。そのことを論じるために、多くの流行語も提唱されている：人新世、シンギュラリティ、ポストヒューマンなど。しかし、こうした議論の学術的前提を明確にすることは容易ではない。一方では、現代科学に基づくテクノロジーがますます私たちの生活を最適化し、世界を理解する枠組みとして機能する

ことで私たちを支配している。他方、デジタル技術は発展を続け、現実と仮想の境界を不確かなものにさえし、私たちの世界観を揺るがしている。世界は自己反映システムの重ね合わせとして理解することができ、イメージや言語の器官やシステムによって、その捉え方は異なってくる。

そこで、本ゼミナールでは、18世紀後半のドイツ語圏の知識人たちが、ある意味では自分たちの世界観が揺さぶられる現代と同じような経験をし、独自の手段でこのプロセスに対処し、理解しようとしたことに手がかりを求めた。たとえばゲーテは、形態学と色彩論において自然の象徴性を探求しようとした。しかし、このようなゲーテ流の自然研究は、近代科学においてはほとんど否定された。その思考方法が自然科学とは別の原理に基づいていたからである。しかし、ゲーテ的な学問理論は、哲学、心理学、心理療法、生理学などでは重要な役割を果たしており、今日では現象学的、人類学的、あるいは民族誌的な研究において、しばしばその例を見出すことができる。そこでは世界は、対象と対峙する主体という意味での二極的なものとみなされるだけでなく、より複雑で多層的な諸関係の中で考察されうる。自然と文化、形態と内容、主体と客体といった対立項がヨーロッパとは異なる形で想像されうるという点で、東アジアの知的文化的伝統の中には、ゲーテの自然観に似たアプローチも存在する。本セミナーでは、そういう視点から自然と文化の関係を議論した。

ゲスト講師であるエーファ・ゴイレン教授は、長年にわたって自然と文化の研究を結ぶ「形態」というテーマを研究してきた。「啓蒙主義による、<世界はひとつではない>という発見は、カントによって認識論的に根拠づけられ、人間は片足を必然の領域としての自然に、もう片足を文化と自由の領域に置くハイブリッドな存在となった。それ以来、対応する主体と客体の二元論と、それに付随する自然と文化の間の指導的差異もまた、世界を自然的対象と文化的対象とに分割し、それらに異なる、究極的には両立しえない認識の形式が対応するようになった。」(Geulen, Haas 2022)

本セミナーでは、ゴイレン教授の研究を指針として、発表とグループワークの中で文学的・学術的テキストを用いながら、今日、私たちが自然と文化についてどのように語り、その関係を再定義することができるのかについて、下記の *Tagesthemen* を立てて探求した。

- 1.自然科学と世界の記述
- 2.古典とメタモルフォーゼ
- 3.自然か？文化か？
- 4.人類の後で

まず、「自然科学と世界の記述」では、近代自然科学が表象する世界観と、それ

によって引き起こされる問題について議論した。次に、「古典主とメタモルフォーゼ」では、「古典」という概念をどのように捉え、文化的「原型」のバリエーションとしてどのようなメタモルフォーゼが出現しうるかを議論した。「自然か？文化か？」では、「自然」と人間の「文化」の境界はどこに引かれるべきなのか、自然と文化の間にどのような関係が存在するのかを分析することを目的とした。最後のトピックである「人類の後で」では、これまでの議論に引き続き、「人間」という概念についても議論した。「ポスト・ヒューマン」や「人新世」という言葉のように、多かれ少なかれ「人間」像が揺らいでいるのであれば、人間は自分たちの現在をどのように理解すべきかを再検討しなければならない。これら4つのトピックの議論を通じて、「ゲーテ的伝統」も再検討し、自然と文化の両方を考慮に入れた文明の方向性を見出すことを試みた。

具体的な内容

3月13日（水）

Begrüßung und Einführung ins Thema

Mario KUMEKAWA (Vorsitzender des Komitees, Keio-Universität)

Jisung KIM (JGG-Vorstandsmitglied, Tokyo Metropolitan University)

Axel KARPENSTEIN (DAAD, Außenstelle Tokyo)

Plenarvortrag (1)

Moderation: Mario Kumekawa

Eröffnungsvortrag: Eva GEULEN: „Gegenständliches Dichten“ im Licht von Goethes Morphologie

3月14日（木）

Plenarvortrag (2)

Moderation: Markus Joch + Koji Ōta

Soon-Hee OH: Das Landgewinnungsprojekt in Goethes *Faust*

Oliver GRÜTTER: Die Last der Kultur und der »zur Kunst geborene Mensch« – Hölderlins Auseinandersetzung mit dem Winckelmann'schen Klassizismus

Gruppenarbeit I A: Wieland, B: Brockes, Klopstock, C: Goethe

Plenarvortrag (3)

Moderation: Yu Takahashi

Gastvortrag: Jin Ho HONG: Natur und Kultur in der deutschsprachigen Literatur um

1900

Filmabend

Leitung: Daisuke Yanagibashi + Andreas Becker

3月 15日（金）

Plenarvortrag (4)

Moderation: Chikako Kitagawa + Hirosuke Tachibana

Gastvortrag: Eva GEULEN: Schreibszene Fan-Fiction

Hyang JO: Das kulturelle Andere und das gattungsmäßige Andere in Goethes *Novelle*

Gruppenarbeit II A: Herder, B: Kafka, C: F. Schlegel

Plenarvortrag (5)

Moderation: Daisuke Yanagibashi + Hiroki Chino

Noboru SAGAE: Die Goethe-Rezeption des frühen Benjamin. Mit einem Schwerpunkt auf der Kritik an Simmels *Goethe in Goethes Wahlverwandtschaften*

Mariko WAKAYAMA: Landschaften der Menschennatur? Zu den Formen und Funktionen von Naturmotiven in Sarah Kirsch's Sprachkunst

3月 16日（土）

Plenarvortrag (6)

Moderation: Markus Joch + Daisuke Yanagibashi

Toyo SUGIYAMA: »... doch im Ganzen einen Eindruck macht ...« Das asiatische Porzellan in den abgelegten Blättern zu Stifters *Der Nachsommer*

Qiaofeng HONG: Die Naturvorstellung der augusteischen Dichtung in Hermann Brochs *Der Tod des Vergil*

Gruppenarbeit III A: Stifter, B: Goethe, C: Ransmayr

Plenarvortrag (7)

Moderation: Yu Takahashi

Takahiro NISHIO: Gewalt der Flut, Macht der Worte. Zur symbolischen Zähmung der Naturgewalten in der deutschsprachigen Literatur des 19. Jahrhunderts

Schlussfeier

3月 17日（日）

Gruppenarbeit IV A: Rinck, B: Benjamin, C: Gross

Abschlussveranstaltung

Leitung: Hirosuke Tachibana + Yuho Hisayama

Noriaki WATANABE: Yukichi Fukuzawas Einstellung zum europäischen Mittelalter – seine „ambivalente“ Haltung zur feudalistischen Kultur

Schlussvortrag: Eva GEULEN: Morphologie in der Geschichtstheorie nach 1945.

Schlussdiskussion

ゼミナールを振り返って

1) 全体として

前年の Joseph Vogl 氏に引き続いで、ゲスト講師 Eva Geulen 氏のきわめて協力的かつ教育的な姿勢と、参加者各位の高いモチベーションによって、連日良い研究会が続けられたと感じている。昨年の反省をもとに、プログラムを大幅にダイエットしたことも成功したと考える。適度な量のテキストにもとづいて、闊達かつ深い議論を展開することができた。

2) コロナ禍後の再開について

コロナ禍により、2020年、2021年は前委員会に「オンラインによる代替企画」を開催していただいたのを受けて、2023年、2024年と慶應大日吉キャンパスでの対面開催となった。かつてないスタイルの中で、初めて経験する課題も多く、実行委員や関係諸氏の負担も大きかった。改めて御礼申し上げたい。

3) 今後について

大学教員が非常に多忙になってきている一方で、ドイツ語教員は減り、学会員も少なくなってきた現在、このようなゼミナールに参加できる人も、実行委員として企画運営できる人も、確実に減ってきている。準備作業の中でも、実際のゼミナールにおいても、心身の健康を害するほどの頑張りによってかろうじて持ち堪えている方々が見受けられた。今後は、期間の短縮や、プログラムの縮減、あるいはゼミナールの形態を根本から変えるなどについて、議論が必要と思われる。

(文責：条川麻里生)

第 28 回 ドイツ語教育研究ゼミナー報告

第 28 回 ドイツ語教育研究ゼミナーは、2024 年 3 月 11 日から 14 日の 3 日間、トーセイ ホテル & セミナー 幕張（千葉県習志野市）にて開催された。

今回の教育研究ゼミナーでは、ビーレフェルト大学 (Universität Bielefeld) から Claudia Riemer 教授を招待講師として招いた。Riemer 教授は Deutsch als Fremd- und Zweitsprache を専門とし、教員養成 (とりわけ教師の専門化) の分野において、言語教育・学習研究、DaF/DaZ の教授法 (特に授業原理・相互作用)、実証的外国語研究 (質的研究) における研究の方法に関する理論の研究に取り組んでいる。

ゼミナーのテーマおよび参加者は以下の通りである。

総合テーマ：「ドイツ語の授業における教科書の役割 – 学習理論的、そして方法論的・教育学的な原則についての考察と、その教科書による、または教科書によらない実践」 (Zur Rolle des Lehrwerks im DaF-Unterricht – Überlegungen zu lerntheoretischen und methodisch-didaktischen Prinzipien sowie deren Umsetzung mit und ohne Lehrwerk)

参加者： Elvira Bachmaier* (麗澤大学) , 阪東知子 (明治大学) , Cezar Constantinescu (明治学院大学), Martina Gunske von Kölln (福島大学)¹ , 堀口順子 (九州大学) , Alexander Imig (中京大学), 亀井明子 (奈良女子大学) , Nina Kanematsu* (筑波大学 (上智大学)) , Jana Klacanska (金沢大学) , 小林大志 (東北大学) , 小池駿* (早稲田高等学院) , 小西優葉 (上智大学・学部生) , 小西優貴 (同志社国際中学校・高等学校) , 草本晶 (麗澤大学) , 中川慎二 (関西学院大学) , 西出佳詩子 (大阪大学) , 太田達也 (南山大学) , 斎藤正樹* (早稲田大学) , Maria Gabriela Schmidt** (日本大学) , Monika Sugimoto (京都外国語大学) , 鈴木友美加 (名古屋大学・大学院生) , 高次裕 (中央大学) , 武井佑介* (麗澤大学) , 牛山さおり* (立教大学)² , Bertlinde Vögel (大阪大学) , 和田資康 (関西学院大学) , Carsten Waychert* (京都産業大学) , Nancy Yanagita* (獨協大学 (上智大学)) (アルファベット順, **実行委員長, *実行委員, ¹オンライン参加, ²ゼミ当日は不参加だったが、実行委員のため氏名を記載する)

第 28 回 ドイツ語教育研究ゼミナールプログラム

	11.03	12.03	13.03
Vormittag		Workshop 1	Workshop 3 Besprechung und Evaluation
		Vortrag 2	
Nachmittag	Anreise	Teilnehmervorträge	Abreise
	Begrüßung und Kennenlernen	Vortrag 3	
Abend	Vortrag 1	Workshop 2	
	Einstiegsaufgabe	Abendessen mit Netzwerktreffen	
	Vortrag		

1. 招待講師による講演およびワークショップ

Riemer 教授による講演とワークショップは、3 日間で計 3 回ずつ行われた。講演は「ドイツ語の授業における教科書の役割」「教科書や教材の扱い」を総合的なキーワードとし、互いに密接に関係する 3 つのテーマ (1. Zur Rolle von Lehrwerken im DaF-Unterricht — Funktionen und Nebenwirkungen/ 2. Didaktisch-methodische Prinzipien und Lehrmaterialien für den DaF-Unterricht an der Hochschule/ 3. Impulse für die Lehrmaterialadaption) で進められた。ワークショップ 1 は講演 1 と対になり、ワークショップ 2-3 は講演 2-3 と一体的につながっている。また、このゼミナールでは、開催に先立って、参加者が Moodle 上でアンケートと準備課題に取り組んだ。ゼミナールでは、アンケートの結果についての議論が、エントリータスクとして行われた。

教科書は従来、ドイツ語の授業において大きな（時に過大な）役割を果たしてきた。今日もなお、教科書は第一の教材であり続けている。教科書の使用は学習者にとっても教員にとって多くのメリットがあるが、デメリットも存在する。教科書を生かすも殺すも教科書を使う教師次第であり、ドイツ語教師にとって、自省的かつ熟達して教科書を扱うことは重要である。ゼミナールでは、教科書の評価、分析する方法や、教材のアダプションによって教科書の限界を乗り越える方法が議論された。

【講演 1】

初日の午後、Riemer 教授による最初の講演 „Zur Rolle von Lehrwerken im DaF-Unterricht—Funktionen und Nebenwirkungen“ が行われた。この講演では、ドイツ語の授業における教科書の役割や、教科書を使うことのメリットとデメリットが話題とされた。教科書を使用するメリットとして、教師にとって、教科書によって授業準備の負担が軽減することや、質の保証が得られること、教材や授業内容についてのインスピレーションが得られること（「石切り場」としての教科書）、学習者にとって、「今、何を学んでいるのか」が把握できることや、学習を自主的コントロールが可能となることなどが指摘された。一方、教科書のデメリットとしては、内容がすぐに古びてしまうことや、多様なクラスの状況やニーズに対応できないこと、授業内容を過度に規定し、制限してしまう（「暴君」としての教科書）ことが指摘された。また、教科書を使わない授業の試みとして、英語教育における Dogma-Bewegung が紹介された。

この講演では、教師による教科書の扱い方の重要性が強調された。この講演で示された「暴君」と「石切り場」の中間点を見つけること、という命題はゼミナールを通じて繰り返され、私たち自身の教科書との関わり方を考え直すきっかけとなった。

【エントリータスク】

講演 1 の後、ゼミナールの開催に先立って参加者が Moodle 上で解答したアンケートの結果が紹介され、その内容をめぐって議論が行われた。

【ワークショップ 1】

ワークショップ 1 は講演 1 の内容に関連している。今回のゼミナールでは、準備として、参加者が、自身が使用したことのある教科書を持ち寄った。このワークショップはペアワークで行われ、各自が持ち寄った教科書から使用経験のある教科書とない教科書の 2 冊を選び、それぞれの課を一つ選んで、比較を通じた分析を行った。Riemer 教授も台湾やカメルーンで使用されている教科書を含むいくつかの教科書を用意し、これらの教科書を分析したペアもあった。

他の参加者が持ち寄った馴染みのない教科書に触れ、馴染みのある教科書と比較することで、自分が普段使っている教科書の思いがけない特徴に気づき、授業内容についての新たなアイデアを得ることができた。

【講演 2】

2日目午前の講演は „Didaktisch-methodische Prinzipien und Lehrmaterialien für den DaF-Unterricht an der Hochschule“ というテーマで行われた。はじめに、第二言語習得が複雑な認知的プロセスであり、非常に個人的であることや、授業が教師と学習者の社会的な相互作用であること、(教室内外での)偶発的な学びの意義などが確認された。こうした複雑性や、教室外で生じる学びの重要性ゆえに、授業について具体的な行動指針を得ることはほとんど不可能であるが、授業設計の一般的な原則についていくつかの示唆を得ることができる。講演では、その一般的原則が教材にも反映されていることが指摘された。

その後、一般的指導原則の網羅的なリストが提示され、その中から中心的な指導原則として、「学習者志向 (Lernendenorientierung)」、「活動志向 (Handlungsorientierung)」、「タスク志向 (Aufgabenorientierung)」、「多言語志向 (Mehrsprachigkeitsorientierung)」の4つの原則が取り上げられた。それぞれの原則についての説明がなされた後、その原則がどのように教材に反映しているのか、具体的な例とともに紹介された。

【講演3】

2日目午後の講演は „Impulse für die Lehrmaterialadaption“ というタイトルで行われた。講演のはじめに、教科書のポテンシャルがどのように発揮されるかは教科書そのものではなく、教師がその教科書をどう使うかにかかっているという命題が改めて確認された。その後、教科書の限界を越えるために、教科書の一部を省略したり、自分で書き直したり、既存の別のものと置き換えたりするアダプションの重要性が示された。さらに、オーセンティックな素材を使ってコミュニケーション・活動志向の教材を作成するための原則としての IKEA-R-Prinzip (I-Identifizieren, K-Kramen, E-Erarbeiten, A-Ausführen, R-Reflektieren) と AHA-Effekt (A-Analysieren, H-Hinzufügen, A-Anwenden)、コミュニケーション学習タスクの開発とアダプションの原則として学習目標とタスクをはじめに設定し、そこに向かうまでのエクササイズを計画していく逆向き設計が紹介された。

【ワークショップ2】

このワークショップは、講演3の内容と関連づけて、参加者がグループで相談して教材のアダプションを実際に行ってみるという形で進められた。ワークショップには「既存の教科書の教材を調整し、具体的な学習者グループに適応させる」または「他の教材からヒントを得て教材を自分たちで開発する」という2つのタスクが用意され、各グループは、ワークショップ1で分析した教科書や、ゼミナールに先立って事前課題として Moodle 上で共有した参加者による自作の補助教

材を用いて、2つのタスクのいずれかに取り組んだ。作業にあたっては、講演2で示された授業設計の一般的な原則から2つの観点を選んで考慮に入れ、教材に反映することも求められた。

【ワークショップ3】

3日目午前に行われたワークショップ3では、はじめに、ワークショップ2の作業を完了し、その成果を発表するための準備が行われた。その後、各グループによる成果が発表された。最後に、振り返りとして、将来的な教科書の役割についての展望について、各参加者の意見がまとめられた。教師としての視座からの意見だけでなく、学習者の視座からの意見、そして出版社の視座からの意見も集められた。

2. アジアゲストによる講演

1日目午後にはこのゼミナールのアジアゲストである輔仁大学（台湾）のChristoph Waldhaus 助理教授の講演が行われた。講演は „Die Konzeption von Lehrmaterialien unter Verwendung der Komplexen Dynamischen Evaluation (KDE)“ というタイトルで行われ、大学での外国語教育において教材開発に複合的動的評価モデルを取り入れる意義が紹介された。

3. 参加者による発表

2日目午後には参加者による研究発表が行われた。発表のタイトルは以下のとおりである。

- Cezar Constantinescu: Chancen und Herausforderungen des Unterrichtens mit einem auf Online-Ressourcen fokussierten digitalen Lehrwerk
- Shinji Nakagawa: Interkulturelle kommunikative Kompetenzen und Mediation - Versuch einer Lehrwerkanalyse aus der Sicht der politischen Bildung
- Yoshiko Nishide: Aktives Lernen durch Videoproduktion - im Hinblick auf den asynchronen Austausch zwischen deutschen und japanischen Studierenden

4. 総括

第28回ドイツ語教育研究ゼミナールは、人々の社会的な交流の再開が本格化する中、従来のドイツ語教授法ゼミナールから名称を変え、新しい場所で活気に満ちた雰囲気のもと開催された。この数年間、多くの教師が従来とは異なる授業実践を経験したことで、教師の教科書への関わり方にも様々な変化があった。そうした中で、Riemer教授の講演を通じて教科書との関わり方を熟考し、ワークシ

ヨップにおいて実際にアダプションに取り組んでみることは、大変有意義な経験であった。このゼミナールで得た知識や経験は、各参加者の今後の授業運営に活かされるに違いない。

なお、ゼミナールの実施にあたっては、日本独文学会、DAAD、ドイツ語学文学振興会、Goethe-Institut から多大な支援をいただいた。この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。

(文責：小林大志)

2023 年度 ドイツ語教員養成・研修講座報告

1. 本講座の運営について

ドイツ語教育部会、東京ドイツ文化センターとの共催で開催している「ドイツ語教員養成・研修講座」は、現在 Zoom による全面オンライン開催となり、全国およびドイツからの参加も可能となっている。受講者は、ワークショップへの参加に加え、各モジュールのテーマについてレポートを作成し提出することが求められる。また、参加者の省察や議論を増やしたカリキュラムを導入し、専用のプラットフォームである Moodle 上では、受講者同士、また受講者と講師の間でドイツ語教育をめぐるディスカッションが展開され、ドイツ語教育について共に考え、学び合うコミュニティが形成される場となっている。

2. 2023 年秋開講のコースについて

2023 年秋開講のコースは、前期が 2023 年 10 月から 2024 年 7 月までの 8 回のワークショップで 7 モジュール、後期が 2024 年 10 月から 2025 年 9 月までの 8 回のワークショップで 4 モジュールならびに *Deutsch Lehren Lernen 4* (以下 DLL) の課題、計 11 のモジュールからなる。前期コースには 18 名の受講者が参加し、2024 年 7 月の時点で第 8 回ワークショップまで終了した。7 月のワークショップは、慶應義塾大学日吉キャンパスで対面で行われ、受講生には交通費を補助した。

後期コースのワークショップ開催日程、モジュールのテーマは以下のとおりである。

後期コース(2024 年 10 月—2025 年 9 月)

ワーク ショップ	日付	ワークショップとモジュールのテーマ		
		前半	後半	
1	10 月	外部講師による講演 三輪聖	M8: ランデスクンデと異文化理解	
2	11 月	DLL 導入ワークショップ		
3	12 月	M8 のレポートの評価と 討論	M9: 様々なメディアと ICT の導入	

4	1月	M9 のレポートの評価と 討論	DLL4, PEP の準備
5	4月	DLL4, PEP の準備	M10: テストと評価
6	6月	Praxiserkundungsprojekt (PEP) プレゼンテーション	
7	7月	M10 のレポートの評価と 討論	M11: 学習者の動機づけと インターアクション
8	9月	M11 のレポートの評価と 討論	講座の総括／修了式 (対面で実施する予定)

日本独文学会研究叢書既刊一覧

154号：「ドイツ語授業における 文法規則の明示的指導の役割」

[Die Rolle der expliziten Grammatikvermittlung im Deutschunterricht]

編集者：清野智昭，太田達也

執筆者：境 一三，太田 達也，梶浦 直子，清野 智昭，草本 晶

(2024年6月8日発行)

155号：「《エリーザベト》変容—翻案ミュージカルの在り方をめぐって」

[Formen der Adaption des Musicals „ELISABETH“ — Kritische
Bemerkungen zur Rezeption eines österreichischen Musicals in Japan]

編集者：関根 裕子

執筆者：関根 裕子，渡辺 芳敬，中本 千晶，高島 勲

(2024年6月8日発行)

広報委員会 2023 年度活動報告

1. 学会ホームページ関連 (2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日)

- ホームページの掲載件数：
 - 学会からのお知らせ件 46 件 (前年度 36 件)
 - 掲載依頼 66 件 (前年度 37 件)
- 総アクセス数 : 150,022 回 (前年度 2022 年 5 月～2023 年 3 月 : 158,296 回)
- 1 日平均のアクセス数 : 約 409 回 (前年度 472 回 ※2022 年 5 月～2023 年 3 月の平均)
- コラム欄エッセイ掲載 : 7 件

2. rundbrief, 会員用フォーラム関連 (2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日)

- メールマガジン rundbrief の発行 : 臨時号を含め計 30 通 (前年度 29 通)
- 会員用フォーラムの投稿 : 計 94 件 (前年度 94 件)
- 会員異動, 加入者のアドレス変更などにより rundbrief, 会員用フォーラムの登録アドレス変更・追加・削除などを行った。登録アドレス数 (2024 年 3 月 31 日現在) :
 - rundbrief : 1,359 (2021 年 5 月 12 日 : 1,411。52 減少)
 - 会員用フォーラム : 1309 (2021 年 5 月 12 日 deutsch 登録者として : 957。352 増加) ※2022 年 3 月に Moodle アカウントの一括付与を実施したため, 大幅に増加。

3. フォーラム不達問題への対応

学会員からの連絡により, フォーラム不達のケースが発覚した(2023 年 4 月)。調査の結果, 1 時間に 1000 通以上の送信ができないというシステム上の制約のため, 会員の一部にフォーラムの投稿が届いていなかった可能性があることがわかった。1 件ごとの配信に僅かな時間差を設けて 1 時間ごとの送信数を制限し, 1 件あたりのフォーラム投稿の配信完了までに約 120 分の時間をかけることで不達をなくす改良を実施した。確認のため rundbrief でアンケートをして会員にアンケートを行ったところ, 7 名から届かなかった旨の回答があったものの, 2 名は非購読者 (うち 1 名はその後新規購読), 5 名は遅れて受信できていたことが分かった。現在問題は解決しているものと考えられる。

4. 学会ホームページ改訂

2024年8~9月にかけて、HPメインメニューの大幅な改訂を行った。「プレスリリース」、「総会」、「日本独文学学会のハラスメント・差別防止に関する宣言」の項目を新設し、「Links」を削除するとともに、「関連団体・書店」情報の更新を行った。

5. その他

- 「研究叢書」に『研究叢書』(Nr.152~Nr.153)を公開した。
- 「ニュースレター」(2023年春号, 2023年秋号)をオンラインで公開した。
- 学会誌の投稿フォームの変更を行った。
- 2023年春季・秋季研究発表会に際し、パスワードを用いてログインできる秋季研究発表会ページを学会ホームページ上に作成した。
- 学会誌の特集テーマの掲載、投稿規定の更新、オンラインジャーナルの更新、学会賞の更新、役員名簿の更新、支部一覧の更新、その他各種MLの作成・更新を実施した。

6. 会員の皆様へのお願い

- メールアドレスが変更になった場合は、忘れずに事務局へメールでご連絡ください。
- 会員用フォーラムに登録してあるにもかかわらず、メールが届いていない場合は、広報委員会にその旨をメールでご連絡ください。
- 学会ホームページへの掲載依頼にあたっては、充分な時間的余裕をもつて完全原稿の送付をお願いします。原稿は出来る限りWordファイルで送付してください。日本語だけの情報の場合でも、タイトルは日本語とドイツ語の両方が必要です。また、希望する掲載期間も併せてお知らせください。

(広報担当理事：伊藤 白)

支部報告

北海道支部

特になし。

東北支部

特になし。

北陸支部

○2024年2月20日付で『ドイツ語文化圏研究』第20号を発行した。

執筆者およびタイトル

【論文】

- ・田邊恵子：「誰もいない場所」——テオドール・W・アドルノの「子どもというモデル」について
- ・早川文人：オーストリア・ファシズム体制下の二人のメディア文学者——R・ヘンツとH・ニュヒテルンの群集祝祭劇を手がかりに

【研究ノート】

- ・宮内伸子：カール・ファレンティンの『少年時代の悪戯』について——1900年頃のミュンヘン郊外の子供の情景
- ・Anja Hopf：“alles so schön bunt hier”——授業報告：戦後ドイツのポップ・ミュージック

関東支部

○2024年6月16日（日）にZoomにて総会を開催した。2023年度の活動報告・会計報告がなされ、2024年度の予算案が承認された。2024年度の活動方針が審議され、以下の方針が承認された。

- ・研究発表会を開催し、主に若手研究者に発表の機会を提供する。

- ・会員名簿の更新、会費の徴収方法の検討、ホームページの改善などを行い、活動の基盤を整備する。
- ・幹事選挙の準備をすすめ、次期の活動に向けて円滑な引継ぎを行う。

○2024年11月24日（日）に第15回関東支部研究発表会を行う予定。現在発表者を募集中。詳細は関東支部ホームページを参照のこと。

東海支部

○支部会員数 108名（2024年7月13日現在）

○2024年7月13日（土）臨時総会・夏季研究発表会及び講演会（愛知学院大学名城公園キャンパス、アリスタワー3階 7301教室）で開催

- ・臨時総会：
規約の改正について
- ・研究発表会：
 1. 大林侑平：ハルデンベルクとノヴァーリス——法学並びに鉱山学教育を受けた詩人の経歴とその作品について
 2. 中川拓哉：戦時下における対独日本宣伝——リリー・アベッグを例に
- ・講演会：
講演題目：「ドイツ語圏越境文学について—その動向と方向性」
招待講師：名古屋市立大学名誉教授 土屋 勝彦 氏

○懇親会：講演会終了後、愛知学院大学名城公園キャンパス内「猿café」にて懇親会を開催。

○2024年秋に、機関誌『ドイツ文学研究』第56号（論文3本、その他研究エッセイ等）を刊行予定、12月14日（土）午前に合評会を、愛知大学名古屋キャンパスで予定。

○2024年12月14日（土）、総会・冬季研究発表会を予定、会場は愛知大学名古屋キャンパスを予定。

京都支部

○2024年度春季研究発表会

日時：2024年7月13日（土）14:00～17:00

会場：龍谷大学和顔館 B109教室

参加者数：41名

研究発表：

1. 「オトフリートの福音書」における受動文

— 格変化語尾を伴った過去分詞の使用条件に対する再検討 —

畠中 啓以力 氏（京都大学大学院生）

2. ヴェルナー・ブロイニヒ『ルンメルプラツツ』における鉱山の表象

中村 峻太郎 氏（京都大学大学院生）

3. 「芸術が奉仕する未来の共同体」を語る作曲家レーヴァーキューン

— トーマス・マン『ファウストウス博士』試論

別府 陽子 氏（京都産業大学非常勤）

○2024年度秋季研究総会・研究発表会は12月14日（土）に京都府立大学で開催予定。

○特別講演会（共催）

日時：2024年9月1日（日）14:00～16:30

会場：オンライン

※ 当初は8月31日（土）に京都大学で開催予定だったが、台風接近のため日程を変更した上で、オンラインにて開催した。

講師：Holger Diessel 教授（イエナ大学）

題目：The Grammar Network. Syntactic categories in usage-based construction grammar.

※ 講演会は京都ドイツ語学研究会が主催。本会および京都大学大学院人間・環境学研究科が共催。

○学会誌『Germanistik Kyoto』について

2000年より年1回刊行。2024年9月発行の第25号掲載論文は以下の通り。

■ 理想の劇場の創出を目指して

— グラッペの演劇理論における悲喜劇的要素について —

児玉 麻美

■ デーブリーン『ベルリン・アレクサンダー広場』における都市と人間の再生
吉田 千裕

■ 第二次世界大戦後のトーマス・マンの中国に関する記述 高辻 正久

- 「読み切りブックレット・ドイツの文化」について
2016年より出版助成を開始。2022年5月に第3巻を刊行。2024年度の執筆申込みなし。

○2024年度支部役員

支部長：青地 伯水（京都府立大学）
支部選出理事：河崎 靖（京都大学）
編集委員：藤原 美沙（京都女子大学），吉田 孝夫（奈良女子大学）
涉外・広報委員：稻葉 瑛志（三重大学），須藤 秀平（京都大学）
会計委員：熊谷 哲哉（近畿大学）
庶務委員：児玉 麻美（奈良女子大学），田原 憲和（立命館大学）

○会員数：139名（2024年8月30日現在）

阪神支部

○2024年3月25日 機関誌『阪神ドイツ文学論攷』第65号刊行。掲載論文・書評は以下の通り。

・論文

- 1) 山取圭澄：ヘルダー『第一批評の森』の考察—レッシング『ラオコオン』との比較を手がかりにして
- 2) 亀井一：作品かテクスト群か？—ジャン・パウル「カツツェンベルガー=テクスト群」をめぐる考察
- 3) 大杉奈穂：東と西の合一—ヘルマン・ヘッセ『ガラス玉遊戯』における「螺旋」
- 4) Hata Kazunari: Goethe und die Dilettanti. Dilettantismus und die Grand Tour
- 5) 田島昭洋：シューベルトとその出版商—芸術家と経済市民

・書評

- 1) 佐藤文彦著『聖家族の終焉とおじさんの逆襲—両大戦間期ドイツ児童文学の世界』（三上雅子）
- 2) 別府陽子著『ブッデンブローク家の人々—『悲劇の誕生』のパロディとして』（鈴木啓峻）
- 3) 宇和川雄著『ベンヤミンの歴史哲学—ミクロロギーと普遍史』（熊谷哲哉）

○2024年3月21日 Claudia Riemer 教授講演会・ワークショップ共催 (DaFゼミナール招待講師) ゲーテ・インスティトゥート大阪主催
於：ゲーテ・インスティトゥート大阪
題目：Wendezeit(en) in der Fremdsprachenerwebforschung und ihre Bedeutung für DaF
参加者数：約30名

○2024年3月23日 Eva Geulen 教授講演会開催 (文化ゼミナール招待講師)
於：関西大学梅田キャンパス
題目：Metamorphosen der Metamorphose vor und nach Goethe (Überblicksvortrag zur Ideen- und Begriffsgeschichte der Metamorphose)
参加者数：約10名

○2024年4月6日 第74回総会・第243回研究発表会開催
於：大阪大学
シンポジウム：Martin Buber, das dialogische Prinzip und das moderne Individuum in der Literatur
報告1) 三谷研爾 (大阪大学)：マルティン・ブルバーガリチア出身のユダヤ人思想家
報告2) Johannes Waßmer (Universität Osaka): Martin Bubers Dialogik und die ästhetische Moderne: Individuum, Literatur, Intellektuelle
基調講演 Doerte Bischoff (Universität Hamburg): Rückkehr zu Jesus: Relektüren einer Gründungsfigur bei Martin Buber und ihre Resonanzen in der deutsch-jüdischen Literatur
参加者数：43名

○2024年7月14日 第244回研究発表会開催 (オンライン)
林英哉 (関西大学)：ディサビリティ・スタディーズと文学研究—障害の社会的・文化的モデルをめぐって
参加者数：23名

○所属会員数：198名 (2024年7月11日現在)

中国・四国支部

特になし。

西日本支部

○2024年10月19日（土）・20日（日） 日本独文学会秋季研究発表会および、西日本支部第76回総会を熊本地区にて開催予定。

○機関誌『西日本ドイツ文学』第36号の編集作業が進行中、今秋発行予定。

○インターワニ西日本を2024年9月20日（金）～23日（月）福岡県大野城市「まなびのやど福岡」にて実施予定。

○第7回九州ドイツ語スピーチコンテスト2024に協賛、2024年11月または12月に開催予定。

○Eva Geulen 教授講演会«Metamorphosen der Metamorphose vor und nach Goethe (Überblicksvortrag zur Ideen- und Begriffsgeschichte der Metamorphose)» 2024年3月19日（火）、九州大学伊都キャンパスにてハイブリッド開催。（参加者17名うち対面13名、オンライン4名）

○会員数（2023年10月1日現在）：123名。

*訂正とお詫び

『ニュースレター2024年春号』に誤りがございました。下記の通り訂正し、お詫び申しあげます。

37ページ

（誤）

6. 教訓なき寓意体系—ギュンター・グラス「蝸牛の日記から」再考

胡屋武志

（正）

6. 初期フリードリヒ・シュレーベルにおける「歴史」の概念——『ギリシア人とローマ人の研究の価値について』（1795）の詩学的射程——

胡屋武志

なお、『ニュースレター2024年春号』の当該箇所は、2024年8月14日に修正更新されましたことを併せてご報告いたします。

ドイツ語教育部会報告

1. 総会

2024 年日本独文学会春季研究発表会（会場：慶應義塾大学。以下、「学会」という）に合わせ、2024 年 6 月 8 日（土）にドイツ語教育部会 2024 年度総会が開催された。議題は以下の通りである。

I 報告事項

1. 2023 年度活動報告
2. 2024 年度の活動方針と教育部会の現状について

II 審議事項

1. 2023 年度決算報告
2. 2024 年度予算について
3. 監事嘱任について

III 会員からの意見開陳

「I 報告事項」の「2. 2024 年度の活動方針と教育部会の現状について」では、会員数や収支決算の経年データが提示され、財政の現状を共有した。今後の会費の値上げ、幹事会選挙の電子投票システム導入、機関誌『ドイツ語教育』の電子化などを見据えた、収支のバランスを改善するための短期・中期計画が幹事会から示された。

「II 審議事項」は、すべて原案通り承認された。なお、2024 年度の監事 2 名は田原憲和氏（任期 2023-2024 年）、保阪靖人氏（任期 2024-2025 年）である。

2. 分掌ごとの活動報告

(1) 部会長

- 1) Goethe-Institut 東京にて国際ドイツ語オリンピック 2024 の国内選考会が行われ（2024 年 3 月 20 日）、教育部会代表として審査員を務めた。
- 2) Thüringen 州代表団が訪日したのに合わせ、Goethe-Institut で行われた高等教育関係者との会合（2024 年 4 月 24 日）に招待され、日本におけるドイツ語教育の現状について説明した。
- 3) Goethe-Institut 主催の Phonetik ワークショップとそれにつづくネットワーキングイベント（2024 年 6 月 29 日）に招待され、参加した。

(2) 編集委員会

機関誌『ドイツ語教育』第 29 号（編集長：田中雅敏幹事）の編集委員会を始動。編集委員会が定めるテーマについての意見を募るフォーラムのカテゴリーは、「ドイツ語教師のモチベーション・アイデンティティ」である。

(3) 企画委員会

- 1) 学会初日 13:00～18:00 および二日目 10:00～12:00 に DaF-Café を開催した。2023 年の京都府立大学（秋季研究発表会）での開催に続き、2 回目の開催。なお、二日目は、教育部会ワークショップ（後述）を行った。
- 2) 学会初日に、教育部会主催講演会（会場：慶應義塾大学）を開催した。

講演者：境一三氏

講演題目：「『資質・能力論』を柱にした外国語教育の質的転換の可能性について—新学習指導要領とその波及効果—」

- 3) 学会二日目に、教育部会ワークショップを開催した。前日の講演会を聴講することが参加条件。参加者は 14 名、全員に修了証が発行された。

概要：年間目標（1 年間授業を受けたのち、生徒にどのようになっていてほしいと思うのか）を考える。それを踏まえて一つのユニットのパフォーマンス課題を設定し、その課題を達成するためには、どのような授業活動を積み重ねるのがいいのかを考える。

内容：①ワークをするにあたっての考え方の説明とグループワークの作業の指示

②グループワーク 1：年間目標とパフォーマンス課題の設定

③グループワーク 2：バックワードデザインでの授業（活動）計画の作成

ファシリテーター：境一三氏（獨協大学）、潮田央氏（神奈川県総合教育センター）、山下誠氏（神奈川県立麻生総合高等学校）、水口景子氏（公益財団法人国際文化フォーラム）、金景彩氏（慶應義塾大学）、佐々木亮太氏（神奈川県立藤沢総合高等学校）

(4) 高等学校・PASCH 担当委員会

- 1) 国際ドイツ語オリンピック国内選考会に際して、能登慶和幹事（高独研会長）が審査員として、草本晶部会長と共に参加した。
- 2) 2023 年 12 月 5 日に、ドイツ大使館にて PASCH 校校長とドイツ語講師が招待され昼食会が開催された。フォン・ゲツツェ大使と共に主に中等教育におけるドイツ語の未来について情報交換を行った。

3) 国際ドイツ語オリンピック2024がゲッティンゲンで開催された（2024年7月15日～24日）。日本からは獨協高校および横浜国際高校から生徒が1名ずつ選ばれ、引率者として能登慶和幹事が帯同した。

(5) 大学入試問題検討委員会

学会初日に「2024年度大学入試問題」（大学入学共通テスト問題・評価書、各大学が実施の問題）を展示した。来場者は14名。

(6) 広報委員会

- 1) 機関誌『ドイツ語教育』第27号をJ-Stageに掲載した。
- 2) EBSCO Information Servicesの学術研究データベースに『ドイツ語教育』が収録されることとなった。
- 3) 『ドイツ語教育』第28号を部会ウェブサイト（部会員限定ページ）にて公開。
- 4) 月2回のMitteilungenを発行。

会員数（2024年7月10日現在）は、正会員388名、準会員72名、賛助会員9団体の計469名・団体である。

（文責：田中雅敏）

2024 年度岩崎奨学生（出版助成）について

2020 年度に岩崎奨学生は、若手研究者のための出版助成に改定されました。2023 年度は申請がありませんでした。

なお、岩崎奨学生（出版助成）の概要は、下記のとおりです。

【奨学生の趣旨】

日本独文学会は、故岩崎英二郎先生のご遺族からいただいた寄付金で「日本独文学会岩崎奨学生」を創設し、若手研究者の育成のために国際学会の発表に対しての奨学生を支給してきましたが、必要とされている援助を行うという観点から、この度より若手研究者の研究成果公開のための奨学生制度へと改定することになりました。

【奨学生の概要】

1. 博士論文の出版に際して、テニュア職を持たない会員に対して、30 万円を上限に出版費用の助成を行う。
2. 奨学生の支給は年度総額の上限を設定する（2020 年度については 60 万円）。また、同一会員への支給は1回のみとする。
3. 募集は年度毎に行い、日本独文学会ホームページその他の手段で会員に広く公示する。
4. 奨学生は 2020 年 4 月より募集を開始する。
5. 奨学生の返済の義務はない。ただし、支給後に、申請対象の研究書の出版を中止した場合、受け取った奨学生を返還するものとする。
6. 他の出版助成を受けることは可能であるが、本奨学生と合わせて出版費用を超えないこと。
7. 奨学生を受けようとする者は、決められた書式の申請書類を日本独文学会事務局に提出する。
8. 審査は日本独文学会常任理事会内に設けた審査委員会が行う。審査委員会は、外部の専門家に審査を依頼することができる。審査の結果適当と認めた場合、奨学生を支給する。
9. 奨学生の原資を使い切った時点でこの事業を終了する。また、事情により、予告なしにこの事業を終了することもある。

「ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査」について

日本独文学会では「ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査」を、2024年5月から7月にかけて実施いたしました。調査は、ドイツ語授業を行っている全国の教育機関を対象としたアンケート（基本情報調査と詳細情報調査）、ドイツ語教員を対象としたアンケート、ドイツ語学習者を対象としたアンケートから成り、現在、集計作業を進めているところです。

調査結果につきましては、2025年春までに日本語版、ドイツ語版の報告書を日本独文学会ウェブサイト上で公開するとともに、2025年の春季研究発表会において発表する予定です。

調査にご協力いただいた皆様には、この場を借りて深く御礼申し上げます。

（調査担当理事・委員長：太田達也）

大学院 Germanistik 関係博士論文題目

2024年3月21日から2024年9月1日までに本学会HPの「博士学位取得情報登録フォーム」(<https://www.jgg.jp/mailform/dsrtm/>)に届け出があった情報を、執筆者ご本人の申告に基づき掲載します。

なお、申告済みの情報は下記URLでご覧いただけます（検索欄への入力無しに「送信する」をクリックすると、全件表示されます）。

https://www.jgg.jp/mailform/prom/prom_src.php

※大学名および氏名は50音順です。

※掲載対象は本学会員の情報のみです。

※カッコ内は取得年を表します。

京都大学大学院文学研究科

飯島雄太郎：トーマス・ベルンハルトの散文作品における遠近法主義について
(2024)

『ニュースレター2024年春号』正誤表

お詫びして下記の通りに訂正いたします。

37 ページ

(誤)

6. 教訓なき寓意体系—ギュンター・グラス「蝸牛の日記から」再考

胡屋武志

(正)

6. 初期フリードリヒ・シュレーゲルにおける「歴史」の概念——『ギリシア人とローマ人の研究の価値について』(1795) の詩学的射程——

胡屋武志

あとがき

「ニュースレター」2024年秋号（Info-Blatt 第11号）をお届けします。情報をお寄せいただいた皆様には、この場を借りて感謝申し上げます。

学会に関する情報のうち、最新のものは学会ホームページに掲載されますが、このニュースレターにしか掲載されない情報もございます。ぜひご一読、ご活用いただけましたら幸いです。

庶務担当理事 太田達也

編集

一般社団法人 日本独文学会庶務委員会

小黒 康正（委員長）

太田 達也（編集担当） 小野間 亮子（編集担当） 川島 建太郎（編集担当）

小林 和貴子（編集担当） 櫻井 麻美（編集担当） 清野 智昭（編集担当）

編集・発行

一般社団法人 日本独文学会

170-0005 東京都豊島区南大塚

3-34-6 南大塚エースビル603

電話03-5950-1147

振替00160-9-135018

E-Mail（メールフォーム）：

<http://www.jgg.jp/mailform/buero/>

ニュースレター2024年秋号

JGG-Info-Blatt / Herbst 2024

2024年9月15日発行